

越軌する身体

姫島盆踊りにおける「伝統」と創造の葛藤

北九州市立大学文学部比較文化学科

内山雅世

目次

はじめに	第2節 「外踊り」
第1章 姫島盆踊りの概要	第3節 アバレポー
第1節 姫島	第4節 アバレ踊りを踊る青年たち
第2節 姫島盆踊りの形態	第4章 新たな視線
第2章 ゆるやかな様式化の過程	第1節 審美傾向化
第1節 念仏踊り	第2節 「見せること」についての事例
第2節 風流との習合	第5章 考察
第3節 ボンアシの成立	第1節 姫島盆踊りにおける踊る主体と「伝統」
第4節 集団の保持と許容のバランス	註
第3章 姫島の盆踊り観	文献一覧
第1節 盆踊りへの熱狂	資料

はじめに

本論文では姫島盆踊りの「伝統」について考察をおこなう。

姫島の盆踊りは毎年新しいものが作られては人氣があって続けて踊られるもの以外の踊りはほとんどその年限りで消えていくという特長をもっていた。しかし現在、盆踊りの保存会の結成や無形文化財への指定により、同じ踊りを続けていくことを前提とする決まりができ、一部の踊りが「伝

統踊り」と呼ばれ固定化されている。私は、それまで常に変化しつづけてきた盆踊りが、変化することを制限された時に何が起こるのかに興味を抱いた。

従来、踊りに関する研究では、調査者が踊り手を外側から観察し、そこから読み取れるものを解釈していくという方法が広く用いられている。しかし、私はそうした研究報告の多くは、踊る人自身が踊りに何を求めているかについてや、踊って

いる人自身だけが感じることができる身体感覚についての内的視点が欠けていると考える。そのため、実際に姫島の盆踊りに姫島の人々と同じ条件で参加することで、盆踊りを内側から見ようとする試みをおこなった。

私は2001年5月26～29日、7月20～23日、8月3日～27日の合計約1ヶ月間姫島へ滞在した。8月には、予備調査の時にお世話になったAさんの紹介で大海集落の空家を借りることができ、大海集落の人々と一緒に、盆踊りの練習・準備・本番・後片付けなどに参加した。

第1章 姫島盆踊りの概要

まずこの章では、姫島と姫島でおこなわれている盆踊りの概要について説明する。

第1節 姫島

姫島は大分県北東部、国東半島の北方5キロメートルにある一島一村の村であり、東国東郡に属する〔兼子：1988、686〕(資料1)。通常、姫島の姫島港と国東半島・伊美港との間に片道25分のフェリーが1日12便往復しており、11月1日より3月31日の冬期は11便になる。

平成12年国勢調査の速報によると、村の人口は2,761人である(註1)。生計の内別は、第1次産業のうち、漁業で生計を立てている人が36%、農業・林業が1%未満、第2次産業が23%、第3次産業が41%である(註2)〔財団

法人日本離島センター：1998、585〕。

姫島の面積は6,78平方キロメートルであり(註3)〔財団法人日本離島センター：1998、585〕、島の沿岸には漁港が点在している。地図を見るとこうした漁港を中心に集落が形成されていったことがわかる(資料2)。

姫島は集落別に6区に分類される。「姫島村史」によれば、地区対抗のスポーツ競技。秋の大祭の舟曳きの順番、青年団、婦人会、消防団などの団体編成、これらはみな1区から6区までの区別〔姫島村史編纂委員会：1986、462〕でおこなわれている。盆踊りの準備の際に作成される盆踊り日程表に書かれたり、観光客に地名を説明する際には、1区 西浦、2区 北浦、3区 南浦、4区 松原、5区 大海、6区 金・稲積、の6区と説明されている。各地区には公民館がある。ただし、6区の金と稲積は人口が少ない集落を2つあわせて形成されたものなので、金と稲積それぞれに公民館がある。

この論文において取り上げる盆踊りにおいても集落ごとに練習や準備がおこなわれる。これらの区分とは別に、島の人が土地の名前を使う時には、集落分類とは違う地名を使うことがたびたびある。

かつての区分は現在の区分とは異なっていたことが下記の資料の記述からうかがえる。

「6区内訳は次の通り。1区 西浦(クラスコ、堂の下)。2区 中村、北浦、須賀。

三区 南浦（西、中篠、東）。4区 松原。
5区 大海。6区 金、両瀬、稲積。太平洋戦争中に、14区に分け、従来のものを旧区、14区に分けたものを新区と称したが、複雑で不便であった。『旧1区の新2区』『旧3区の新8区』というような呼び方をしていたが、戦後新区の呼び方は自然消滅のかたちになっている。」〔姫島村史編纂委員会：1986、462 - 463〕

この記述から、かつての集落の区分は現在よりも詳細であり、時代的な変遷があったことがわかる。上記の資料には、姫島で使われることのある場所を示す170におよぶ地名も記述されている。

姫島の方言には国東半島とは異なる独自のものが多くあり、同じ姫島内でも地域によって若干の違いがある。今のように、昭和44年に島の東西を結ぶ道路が完成し自動車が普及する以前は、島内の行き来も少なかったからである。そのため、姫島では今でも地区ごとの結びつきが強い。

年間来島者は約57,600人である（註4）〔財団法人日本離島センター：1998、585〕。姫島は戦前から観光の目的で訪れた人が多いそうだが、「姫島が観光地として脚光を浴びてきたのは、昭和25年5月、瀬戸内海国立公園に指定されてからである。更に、昭和56年、盆踊りで踊られる「キツネ踊り」がテレビのコマーシャルに登場してから、全国的に有名になった」

〔前掲〕という。このように島外の人々の姫島に対するイメージはキツネ踊りと強くむすびついている。

しかし、実際の姫島の盆踊りではキツネ踊り以外にも数多くの踊りが踊られている。上記のように、姫島は地区ごとにまとまりをもち、地区よっての違いは方言のみではなく、年間行事などにも見られる。例えば大海集落のみ荒神を祀る「荒神祭り」という祭がある。

このように姫島は、地区ごとの様々な違いが網の目のように絡み合って文化が形成されている。同様に盆踊りにおいても地区ごとの特徴があるため、姫島の盆踊りはその違い抜きには語るできない。まず次節において、多様な姫島の盆踊りについての概要を説明していく。

第2節 姫島盆踊りの形態

姫島の盆踊は、太鼓打ちや「一番音頭」・「二番音頭」という盆踊歌（以下、盆歌）の歌い手、中踊り・「外踊り」・「アパレポー」という踊り手によって構成されている。

「外踊り」という名称は近年になって島の外から来た研究者が付けた可能性がある。島の人自身は「外踊り」という名称で踊りを表すことは少ないからである。しかし本論文では便宜的にこの名称を使用する。

これら歌い手と踊り手は各地区の公民館の前に作られる「盆坪（ボンツボ）」と呼ばれる円形に

柵を作りその中央にやぐらを組んで太鼓を置いた場(資料3)に集まって盆踊りをおこなう。それぞれの配置を図にして説明する(資料4)。

姫島の盆歌は一番ごとに七七七五で独立していて連作的に作られたものである。現在は2つの歌が良く歌われており、それを15番ぐらゐまで繰り返して歌うが、昔はもっと歌の種類も番数も多かったという。よく歌われている盆歌の1番の歌詞は、「歌を歌えと せめかけられて 歌いかねたよ この座敷」というものである。「一番音頭」とは、盆歌の歌詞の最初の七音のうち三音を省いて四音と次の七音を歌う人、「二番音頭」は「一番音頭」が歌った後にその次の七音と五音を歌う人のことを指す。「一番音頭」と「二番音頭」は太鼓の周辺で歌を歌う。

日本伝統芸能研究者の吉川によると、姫島の盆踊りの踊りは、その衣装や支度に着目した場合、3つに分けることができるという。それは 全く日常の普段着のまま踊るもの、 化粧をし着飾ったりして踊るもの、 仮装をして踊るものの3つである〔吉川：1975、119〕。 は、中踊りを指し、 ・ は「外踊り」を指している。

中踊りは中央に置いた太鼓があるやぐらを円になり内側を向いて取り囲み、ごく単純で地味な足の動きのみで踊るものである。歌を歌う者と中踊りをする者は男女・年齢を問わないが、年寄りがおこなっていることが多い。この踊りは盆踊りにおいて目立つ存在ではない。しかし、「外踊り」

の組が入れ替わる間や、踊り手が盆坪になかなか来ない間も、盆踊りが始まってから終わるまで途切れることなく踊り続けることで、盆踊りの流れを止めない役割を果たしている。加えて、中踊りが地味であることによって「外踊り」の華やかさや変わった趣向が引き立てられる役割も果たしていると考えられる。

「外踊り」は、集落ごとにあらかじめ振り付けの練習がおこなわれる。踊る場所は中踊りより外側を円になって取り囲んで踊る。「外踊り」が中踊りより外側で踊られるのは、踊りを見る人が盆坪の外側から見るので目立つためであろう。中踊りとは違って見られることに意識を置いているため、扮装や踊りに工夫を凝らし、踊る組によって違いが大きい。2001年には8月14日から17日の間に全部で約70組の「外踊り」が踊られる。上記の「化粧をして着飾って踊るもの」は、小学生までの女の子や婦人会や老人会の女性が着物を着て踊りの美しさを見せようとするものを指す。そして の「仮装をして踊るもの」は、姫島盆踊りの演目の多数を占めている。具体的には「キツネ踊り」や「たぬき踊り」など動物を模した踊りのほか、歌舞伎や映画やテレビから題材を得た「曽我兄弟」「弁慶と義経」「三番叟」「忠臣蔵」などの踊り、「田植え踊り」などのように生活の中から題材を得たものなど様々なものがある。「外踊り」については第3章第2節でまた具体的に説明する。

アバレポーは、集落ごとに練習をして踊られるものではなく、踊りたい者が有志をつのって前触れなく盆坪に踊りに来るものであり、即興の要素が強く、様々な趣向でおこなわれていた。その趣向は奇抜なものが多かったという。あらかじめ手のこんだ計画を立てている者もあれば、当日思い付きで踊りに来る者など様々であった。しかし、現在の姫島盆踊りでは、本来のアバレポーはほとんど現れなくなっている。アバレポーについては第3章第3節で詳しく説明する。

太鼓打ち、一番音頭、二番音頭、中踊りは、各盆坪ごとにその地区の人が最初から最後まで途切れることなく続け、「外踊り」を踊る人たちは、盆坪を踊りの組ごとに移動して踊ってまわる。アバレポーは神出鬼没である。このように、姫島盆踊りは様々な要素で構成されている。中踊りや太鼓や盆坪などは変化が少なく、盆踊りの基盤を固める役割を果たしている。一方で、盆歌や「外踊り」やアバレポーは在り方次第で色々な変化がつけられるものであることがわかる。

現在の盆踊りは新暦の8月14日から17日まで行われるが、昔は旧暦7月15日前後であった。期間は4日間であるが、その間ずっと全ての集落で盆踊りが踊られているわけではない。

現在では、観光客が多く島を訪れる8月15、16日は、全ての部落が踊りの組を作って他の集落へも互いに踊りに行くが、盆の習慣自体は今でも「本村」、大海集落、金・稲積集落の3つの地

域で異なっている。昭和44年に松原集落と大海集落を結ぶ自動車道ができるまで自動車で行き来をすることは出来ず、金・稲積集落も以前は山中にあったため他集落と行き来するのが難しかった。そのため、盆踊りなどの共同体的な行事は昔から3の地域に分かれて行われてきた。そこで、3つの地域ごとの現在の盆踊りの行われ方の違いを、簡単に説明してみたい。

1 - 2 - 1 本村ブロックの盆踊り

1つめのブロックが「本村」である。「本村」とは矢筈岳西部に位置し1区から4区までを指し、姫島の人口の多くが集中している地域である。本村では、14日から17日の4日間、盆坪が各地区の公民館の前に作られる。加えて、伊美からのフェリーがつく船着場の隣にある中央フェリー広場にも、15、16日のみ、盆坪が作られる。この盆坪は、以前、南浦にある忠魂碑の前で踊られていたものを近年フェリー広場に移したものである。

15、16日が最も盛大で、1つの集落につき3～5組の踊りが踊られる。14日は15、16日に比べると踊りの組が少なく、各地区2～3組ずつ踊りが踊られる。そして、子どもの踊りがほとんどである。南浦地区で約40年盆踊りの指導にあたっているBさんによると14日は、「前夜祭みたいなもので、心の準備のためにあったほうがいいもの」ということだ。平成12年に4日間

は長いので14日の踊りをやめるかどうかのアンケートが取られたが、存続することになったそうである。

17日の供養盆については、「青年団が主催して、新盆の人の位牌と灯籠を各区の盆坪に集めて踊り、各戸主は正装して「本村」の盆坪をまわって、新盆の人の霊にお参りする。この時は、新盆の人の親族や親戚が招かれており、並んで人々の挨拶を受ける」〔吉川：1975、108〕、この形式は現在でも同じであり、「17日の供養盆に踊られる曲はあまり騒がしいものはやらず、化粧の踊りも坊さんの踊りなどといったものが踊られる」〔吉川：1975、110〕という習慣も現在まで引き継がれている。17日には踊りの組も少なくなり1つの集落につき2～3組の踊りが見られるだけである。吉川によると1972年に90歳だった老女の話では、老女の若い頃には旧7月17日の供養盆の後の地藏盆や「お大師様の盆」（お大師様の日の前日の二十日の夜）にも、お大師様をまつる堂のある真戒寺に集まっておどったという〔吉川：1975、108〕。現在でも真戒寺では8月20日に、南浦集落の青年団によって境内で中踊りのみが踊られる。

1-2-2 大海集落の盆踊り

著者が盆踊りに参加した5区大海地区が2つ目のブロックである。近年は15日に本村と同様に公民館に位牌や灯籠を集めて供養盆を行う。そし

て元々20日におこなわれていた「お大師さまの盆（大師盆）」は、15日の供養盆から20日まで日にちが空くと盛り上がらないため現在は16日におこなわれる。「お大師様の盆」には、公民館内に盆坪の方向に向かって祭壇が作られ、大海の人達は普段は家の仏壇などに置いている大師像や供え物の飲み物類を公民館の祭壇に持ち寄る。集落に新盆の人がある年には盆坪が2日間作られる。著者が参加した平成13年の盆踊りでは、その年大海集落に新盆の人がなかったため供養盆はなく大師盆のみであり、大師盆が15日に繰り上げられた。そのため、大海の盆坪は15日の1日間のみ作られた。しかし、16日も15日と同様に他の地区の盆坪へは踊りに行った。

1-2-3 金・稲積集落の盆踊り

第3ブロックの6区の金と稲積は、公民館も別々にある部落であるが、両部落とも人口が少ないため、盆踊りは合同で行われている。盆坪は各部落に1つずつ作られ、15日が稲積、16日が金、という風に2部落合同で1日ずつ供養盆がおこなわれる。年によって供養盆の順番は入れ替わる。そして、両部落が15、16日ともに約2組ずつ踊りの組を出す。そして通常は17日にそれぞれの部落で「お大師様の盆」がおこなわれるが、その年の死者がいずれかの部落にしかなかった場合は新盆のある部落のみで供養盆がおこなわれ、「お大師様の盆」が16日に繰り上がる。「お大

師様の盆」は17日におこなわれる場合は中踊りのみが踊られるそうである。

このように、盆踊りの形態は地域ごとに大きな違いがある。そして、年ごとにその地域の状況に応じて形態が柔軟に変化しており、「姫島盆踊り」と一口で言ってもその内部では地域ごとに多様性がある。

第2章 ゆるやかな様式化の過程

第1節 念仏踊り

姫島の盆踊りは、鎌倉時代の念仏踊りが発展したものであるとされている。そこでまず、念仏踊りとはどういうものなのかを説明する。

念仏踊りとは、「念仏や和讃を唱えながら、鉦、太鼓、瓢などをたたいて踊る民俗芸能」〔高山：1987、320〕であり、踊念仏ともいわれ、「念仏による衆生の済度のため天台の僧空也上人（九七二没）が、念仏唱歌と踊躍によって人々を没我の宗教的境地に誘う教化の手段として始めたもの」〔西角井：1974、414〕という。それは平安時代のことである。空也は諸国を遍歴して民衆に念仏を広め、市聖とも阿弥陀聖とも崇敬されたが、京の市や四条の辻で踊念仏を始めたと言えられる〔高山：1987、320〕。そして、そののち二六〇余年を経て一遍上人が再興した〔西角井：1974、414〕。今日全国に伝わる念仏踊りは数多く、その内容も多彩である。念仏踊りが歌舞伎の源流となったこともよく知られ

ている。

念仏踊りの歴史的な概要はこういったものだが、「はたして空也の念仏に踊りが伴っていたかどうかはあきらかではない〔高山：1987、320〕」ようである。しかし、鎌倉時代に一遍が再興した念仏踊りについては「一遍上人絵伝」（1299）という資料が残っており、その様子を垣間見ることができる。

この資料について、「万有百科大辞典」の「念仏踊」の項においては、「『一遍上人絵伝』の弘安二年（1279）春の項に『機熟しけるにや・・・一期の行儀と成れり』と見え、またその踊ぶりは、『ともはねよかくてもおどれ ころごま みだのみのりをきくぞうれしき』とあるので跳躍乱舞したのであろう〔西角井：1974、414〕」、と評されている。また、「日本大百科全書」の「念仏踊」の項においては、「一遍上人絵伝」に書かれている様子について、「それは勇躍歓喜しつつ乱舞形式で踊ったものようである。このように踊念仏にはとくに定まった型がなかったため、のちには他の芸能と結びついたり風流化したりして娯楽的色彩を強めるに至り、全国各地でさまざまな特色をもって行われるようになった〔高山：1987、320〕」と書かれている。

これらの記述から、現在残っている念仏踊り、及びそこから派生したさまざまな芸能は、元を辿れば決まった形はなく、民衆がとにかく何らかの

感情を表出するために踊るうちに様式が出来上がってきたものであることが推察できる。

次節では、上で引用した「日本大百科全書」の記述にもあるように、念仏踊が風流（ふりゅう）化し、その形を変えたということについて説明する。

第2節 風流との習合

風流とは「日本芸能史および芸能上の用語」〔西角井：1988、665〕である。「日本大百科全書」の「風流」の項にはその歴史上の意味が記述してある。

西角井によると、風流には祭礼の風流、延年の風流、狂言風流、民俗芸能の風流などがある。古く中国では遺風、余沢（『後漢書』王暢伝）を意味したが、日本では風流士と書いてみやびお（『万葉集』巻二）と訓んだように、みやびやかの意に用い、平安時代には奇巖怪石風流（『中右記』）とか金銀錦繡風流美麗（同）とか、明媚なありさまや華麗な意匠、装いをさすようになった。そして平安末ごろになると、「京中儿女、風流を備え、鼓笛を調べ、紫野社に参る」（『百練抄』）や、「傘のうへに風流の花をさし上（略）乱舞のまねし」（『梁塵秘抄口伝集』）などに見られるように、芸能にも用いられるようになったという〔西角井：1988、665〕。そして風流踊といわれる分類もあり、それは「きらびやかな仮装をし、囃子や歌を伴い大勢で踊る形式の民

俗芸能」であり、「各地に分布する民俗芸能はほとんどこの風流踊の範疇に入る」という〔西角井：1974、500〕。

このように風流とは、現在では行われる場によって形式が定まっているものが多いが、風流という語が生まれた段階では特に定まった形式はなく、その時代の芸能が持つ華やかな雰囲気をもつ総称したものであったことがうかがえる。

柳田國男は「日本の祭」の「祭から祭礼へ」という節の中で、風流についても少し触れている。

柳田の説によれば、祭の原初の形態は神祭りであり、それが都市の発達によって祭礼へと変化していくという〔柳田：1990、240-263〕。柳田は祭礼について「今の多数者の用法からいうと、祭礼はつまり祭の一種、特に美々しく花やかで楽しみの多いものと定義することができるかもしれぬ」〔柳田：1990、242-243〕と説明している。そして「一般的なる祭礼の特色は、神輿の渡御、これに伴ういろいろの美しい行列であった。中古以来、京都などではこの行列を風流と呼んでいた。風流はすなわち思いつきということで、新しい意匠を競い、年々目先をかえて行くのが本意であった。我々のマツリはこれあるがために、サイレイになったともいえるのである。」〔柳田：1990、247〕と述べている。

こうした説明を補足するものとして「万有百科大辞典」の「風流」の項には、「はじめは仮装行

列のようなものであったが、だんだん芸能化して演劇的な内容をもつようになり、」〔木戸：1974、500〕という記述がある。

そのため、姫島の盆踊りの場合は、初めは明確な形のない乱舞形式だった念仏踊りに、風流の要素を取り入れ、見る人がより楽しむための工夫が加えられながら現在の形が形成されていったと考えられる。

そして柳田は祭の時代的な移り変わりとして、「祭の参加者の中に、信仰を共にせざる人々、言わばただ審美的の立場から、この行事を観望する者の現れたこと」〔柳田：1990、248〕をあげている。姫島においても、盆踊りを見る者が楽しめるように毎年創作踊りが新しく作られるなど様々な工夫がされるようになった、と考えられる。そして加えて言えば、踊る人自身が楽しめるようにということもあったであろうと推察できる。

このように風流とは常に変化しつづけていく芸能であった。そして姫島の盆踊りはこの特徴を具えている。吉川周平の論文にも「姫島村の盆踊は、毎年新作の踊りが出るなど、風流としてみるべきものがあり、」〔吉川：1975、105〕とある。こうしたことから姫島盆踊りが成立してきた過程は、踊る人自身がより楽しむために常に変化しつづけるという方法を経てきたものであることがわかる。その過程において、さまざまな様式が盆踊りのために成立してきたが、それは「常に変

化し続ける中で」、残ってきたものなのである。

次節では、姫島盆踊りを身体的に規定する様式として考えられるボンアシについて説明と考察をする。

第3節 ボンアシの成立

姫島の人に盆踊りについて話を聞くと、「足はどの踊りもほとんど同じだからとにかく足を覚えれば大丈夫」とよく言われる。実際には演目によって複雑な足の動きがあるものもあり、踊りによって工夫を加えるのでその言葉の通りとは言えない。しかし、振りが簡単な踊りでは、衣装や持ち物が変わったりという工夫が加えられるが、基本的に似た足の動きをするものが多い。そのため島の人の言葉はこの足の動きのことを指している。

姫島では、盆踊り独特の足の動かし方を「ボンアシ」という。この「ボンアシ」の定義は吉川によると、「左左・右右と同じ足を2度ずつ動かすことで、たとえば左足を前に出して一たん左足を戻してから、もう一度左足を前に出して一歩進み、次に右足を前に出して一歩進むというような足の動かし方〔吉川：1975、126〕」である。しかし、私が姫島で実際に見たところによれば、「前に出して一たん戻す」という足の動きが省略されていることが多く、そのまま足を下ろしている人がほとんどであった。

吉川周平は、「ボンアシ～盆踊りにおける足の運びが意味すること～」という論文で、ボンアシ

の成立について以下のように書いている。

「姫島でももとは夜があけるまで踊ったが、盆踊りを夜があけるまで踊りつづけるのは、死霊が完全に送りどけられて、戻ってこないようにするためである。姫島の外側の踊りは動きが激しいので、1周もしないうちに止めてしまうことがあるが、中踊りは最後まで、とぎれずに踊り続けられる。

私は、もともと上下の垂直運動であったフミカエアシによる跳躍の連続によるオドリの動作が、夜あけまでというような長時間の踊りに使われるようになったとき、エネルギーを節約するために水平運動化する工夫がなされたのだと考える。」〔吉川：1997、608〕（註5）

この説から考えると、ボンアシは踊る人の必要に応じて成立したものであるということが言える。

姫島では踊りをほめる時に、「あの子は腰前がいい」「腰元がいい」などという言葉がしばしば使われる。これらの言葉は下半身の重心が安定していることを指し、それが評価に結びつくのである。そのことから姫島の踊りにおいて下半身の安定が重要であることがわかる。

下半身が安定していると、上半身はより自由に動かすことが可能になる。踊りの名人と言われる人々は振りのある踊りに自分なりのアレンジを加えることができる。それは、ボンアシを習熟して

いることによってからだをしっかりと支えているためにできることである。ボンアシはそのように個人によってアレンジを加えるための基盤にもなっているといえる。

ボンアシが具体的にどのようなものなのか説明するために、以下に、私が大海集落（以下、大海）の練習初日にボンアシの練習をした時のことを具体的に記述する。

大海の踊りの指導は全てAさんという方があたっている。盆踊りの練習は公民館の前の空き地で、盆踊り用の外灯の下でおこなわれる。

まず子どもを肩を隣り合わせるように一列に並ばせ、基本の足の動きである左、右 右、左 左、右 右、左・・・というボンアシだけを練習する。子どもとは幼児から小学生までを指している。並び方は男の子が公民館側から広場に向かって右側、女の子が向かって左側である。練習は、イチ（で一拍呼吸をおいて）二（でまた一拍おいて）、イチ、二、イチ、二、・・・というリズムでおこなう。足を動かす際には「ドッコイショ」という掛け声を出す。「ドッコイ」の声と共にまず「イチ」の足を出し、「ショ」で「二」の足を「イチ」の足の横に下ろす、の繰り返しである。これを後ろで手を組んで少し膝を曲げた状態で連続しておこなう。

そしてSさんが「ドッコイショ、ドッコイショ」という掛け声をかけるのに合わせて足を動かしていく。空き地の端まで行くと、公民館側のほ

うに戻って行く。Aさんはその中で何度も「もつとつぶしを曲げい、つぶしを曲げなつまらん」と繰り返す。「膝を曲げろ」という意味で、腰を落とし重心を低く保たせるための注意である。そして「ただ前に出すだけじゃなしに足はちゃんと両方上に持ち上げてから下ろさんか」と言う。

子ども達の足の動きを見ていると、「二」のほうの足を着地する場所がどこなのかははっきりせず、個人差がある。女の子達は、先に出した足の近く（よりすこし後ろ）に「二」の足を下ろしている者が多く、たぬき踊りを踊る男の子達には先に出した足より大分横に離れた所に「二」の足を着地させる者が多い。Aさんは、先に出した足よりすこし前方に「二」の足を着地させていた（資料5）。

後日、ボンアシの「二」の足をどこに下ろすかについてAさんにお聞きすると、「かっこよければいい、そろえるのが前でも横でも教える人の癖。別に決まってない。俺は横に出すのは好かん。」とのことだった。

次に、その日の練習に自分が実際に参加してどのようにボンアシをおこなったかを書いてみたい。

私は、この前日に南浦集落の練習をみており、盆踊りの文献を読んだり人の話を聞いたりしていたので、盆踊りの概略を練習前から把握していた。よく聞く踊りの評価として「今の人は腰が高くてダメだ」というものがあった。そして「上手い人

は十分に腰が落とせる」とも聞いていた。

一般的に日本の踊りにおいて、重心を低く保つことが重要であると言われている。そして私が普段おこなっている舞踏（註6）の練習においても、下半身の強化が非常に重要であった。腰を落としすり足の練習をする。そのため私は足の動きの練習では腰の位置に留意する習慣が、ある程度身についていた。

上に記述しているように「二」の足を下ろす場所がまわりの人を見ているとはっきりしなかったのだが、ボンアシで何往復もしているうちに、私も、「最も自分にとって気持ちがいい所に」足を着地させ始めた。

私にとっては、男の子達がしているようにすこし横に離れている所に足を下ろすのが、少しコミカルな感じがして楽しく、かつリズムが取り易かった。しかし、力強く足を下ろすのではなく、繊細に音を立てないような感じでスッと足を下ろすのがいいと感じていた。つまり「自分だけの足の動き」を創り出して楽しんで動いたのである。たしかに、これでいいのだろうかという迷いはあった（資料5）。

しかし練習が終わって公民館前の人が集まっている所に戻っていくと、練習しているのを見ていた人達から、私のボンアシの動きに対して「あんた上手」とか「あんたは素養がある」とか、「上手やけん、『あの人は誰やろうか』って話しよったんよ」などという評価をもらった。

私が姫島の人にボンアシについてよい評価を受けたのは、重心を落としていた点と、子供に混じていたため目立っていたという点のためではないかと考える。しかしこのように私にとって新しいスタイルの踊りであっても、感覚と基本をつかみ自分なりのアレンジを加えた方法がよい評価を受けたことは確かである。これらの事例から、ボンアシを規定する枠組みの緩やかさを読み取ることができる。

ボンアシは一定の様式を持っているが、踊る人の独自の癖も許容されるため、ボンアシによって風流の特徴である流動性が制限されることはなく、むしろよりのびのびと即興性が発揮できるようである。

そしてもう1つ私の動きが良い評価を受けた理由として、舞踏の感覚を取り入れたことがあると考える。

私の普段おこなっている舞踏の肉体訓練においては即興の踊りであるという性格もあって、同じ動きをさせられても、個人個人で微妙に違う動きをすることを許容されている。それは一人一人のからだが違う限界を持っているからであり、それを自分で把握して限界までの範囲で動くのである。そのため、人に「こうしなさい」と言われたものを自分なりに練り直しておこなうことが出来る。

そのため、舞踏の方法をこの姫島の盆踊りのボンアシにも用いることができると考えた。Aさんの教え方は細かい所まで限定する教え方ではなく、

一人一人の微妙な違いに頓着しないものだったからである。

舞踏を踊る時に私は、自分の内面の感情の動きを感じながらからだを動かしながら、「最も気持ちがいい箇所」にからだの動きを合わせていこうとする。そして、その動きをどのようにおこなうかによって感情自体にも変化が生じてくる。からだの動きと感情の変化を連動させるのである。

例えば、「先に出した左足に右足をそろえる」という動作も、そろえる右足をぞんざいに地面の上に置くのと、意識してしっかりと力強く置くのと、音を立てずに静かに置くのとではそれに伴う感情の動きが異なってくる。自分の感情の動きを汲み取ってそれにとからだの動きを慎重に寄り添わせていく作業である。

Aさんの動きを見ていると、「足だけを動かす」のではなく、やはりそれに伴ってからだ全体の動かし方をAさん自身がその踊りに合わせて作り出す感情の動きと合致させていると感じる。前日に南浦集落の練習で踊りを教えているBさんの動きを見ているときも同じように感じた。

このように、私が舞踏において限定されすぎないからだの動きに自分の感情の動きを乗せてからだを動かすということを普段からしていたこともボンアシの仕方に対して良い評価を受けた理由の1つだったのではないだろうか。

次に、からだの動きと感情の動きの関係についての考察を深めるために、このボンアシの練習から更に踊りの練習の段階が進んで、実際に振り付きで踊る時にはどのような感覚でからだを動かしていたかについて説明してみたい。

私は盆踊りの本番においては「たぬき踊り」と「田植え踊り」のみに参加したが、練習においてはその他にも小学生の女の子までの踊りである「女船頭さん」という踊りの練習にも毎日参加していた。この踊りは1人1本白い櫛の小道具をもっておこなう。練習でも実際に使って動いた。この踊りの一連の動きを説明する。

まず左足を左前に出すのと同時に手に持っている櫛を左肩に持ち上げて乗せ掛けて、右足を左足の横（人によっては左足の少し前だったり真横だったり少し後ろだったりして個人差がある。以下この説明は省略する。）に置く。

次に肩に櫛を掛けたまま右足を右前に出してその足に左足を添えるのと共に右手を顔の右上にかざして右斜め上に向かって空を見る動作をする。

同様に、肩に櫛を掛けたまま左足を左前に出してその足に右足を添えるのと共に右手を顔にかざしたまま、今度は左斜め上に向かって空を見る動作をする。

そして櫛を肩に掛けたまま、右足を右前に出す時に、右手の手のひらを顔の方に向けて目の辺りを隠す動作をし、右足に左足を添えるのと共に、右手を右前方に手のひらを向けてまっすぐに伸ば

す。

同様に櫛を肩に掛けたまま、左足を左前に出す時に、右手で目の辺りを隠し、右足を添えるのと共に、右手を左前方に伸ばす。

そして右足を右前に出すのと共に櫛を両手で横向きに持ち頭より上まで持ち上げ、左足を右足の真横にそろえるのと同時に櫛を下ろす。

次にここで2人組みになる。2人組みの内、前で踊っているものが時計回りにからだを回転させて、後ろの者に向かって少し右側に立つ。この動作は、回転する者は右足を後ろに下げて振り返るのと共に櫛を両手で縦向きに持って地面に先を付け、手前に櫛を引き、次に前方に傾けてこぐ動作をする。回転しない者は左足を後ろに引くのと共に櫛を前の者と同様に地面に付け、手前に櫛を引き、次に前方に傾けてこぐ動作をする。

そのまま手前に櫛をこぎ、次にもう1度前方にこぐ動作をする。

そして「ソライターソライターソライターヨイヨイ」と掛け声を出しながら、櫛を下向きに持ったまま向かい合った人の右側を、右足、左足、右足の3歩をソライターの掛け声に合わせて飛び跳ねながら回転しつつ移動し、最初の向きにからだを戻して、ヨイヨイの掛け声と共に左足を右足の横にそろえる。

これが一連の動きである。これを終わりの合図がされるまで何度も繰り返して踊るのである。

私は、この踊りの振りには皆が踊るのを見ながら

真似をして覚えた。そのため練習の最初の方は振りの真似だけをして動き方を覚えようとしていた。しかし、何日か練習して踊りの振りを覚えると、ボンアシの練習をしていた時と同じように自分だけのアレンジを加え始めた。

私はこの踊りに、自分だけの工夫を加える過程で踊り流れを作った。その流れを説明してみる。

権をかつぐ所は、船頭としての勇ましさを表すために、顔の表情を引き締め大きな動作で動く。

・ の空を見る動作では、勇ましさと共に女船頭が持ち合わせている色気の部分を表現したいと考えた。顔に手をかざすことによって顔に影が出来るため、それによって色気を感じさせることを意識し、前の動きとは変化を付けて、柔らかくゆるやかなからだと感情の動きに変える。

・ では ・ と同じ感情が続き、同様に色気を感じさせる柔らかくゆるやかなからだと感情の動きをするが、よりも少し内面に向かった感情に変化させる。ここでは顔にかざすのではなく顔を隠す動作なので顔の見えない部分が大きくなるため、外側に放出する感情より内面に向かう感情の割合を大きくするのである。

・ ・ において権を持ち上げた後こぐ動作では女船頭が最初に権をかついだ時の勇ましい感情に戻り、決意を持って舟をこぐイメージを持って動作をする。

のソライターの所では内面に向かっていた感情を外側に向かって一度に放出して自分を物語自

体から解放するイメージで飛び跳ねる。

これは誰に説明されたのでもなく、私が練習する過程で作った流れである。ボンアシの動きを自分なりの動きにした時と同じように、踊りの練習をする中で「こうするのが気持ちがいい」という自分の欲求に従って個人のアレンジを加えたのである。

こうした流れを構成した要素は、私が舟をこぐ時の権の動作や女性がひよる動作などをどこかであらかじめ見て、その動きに対して「勇ましさ」や「色気」などの感情を感じ取った経験から来たものである。そしてそのイメージを「女船頭さん」の踊りに当てはめたのである。

「さまになっている」と感じさせる動きをすることが出来る人がなぜ「さまになっている」と思わせる動きができるかということは、こうした自分なりのイメージを作り上げることと関係があると考えられる。

Aさんは足の動きや踊りの振りも実際にやってみせるのだが、Aさんがするとその動作自体が「さまになっており」言葉で説明を加えなくても、「ああこういう感じか」とその動作を見ることで納得させられる。Aさんは言葉で「こっちを出してこうそろえて」などとは教えない。私はAさんの動きを自分で解釈して動いていた。なぜAさんの動きを見て「さまになっている」と感じるかというと、私がすでにAさんの体の動きが意味するものから受ける感情を経験したことがあったから

である。例えばAさんがする手を顔にかざす動作に対して「哀愁」という言葉でよく表されるような感情を感じて、その動きを「さまになっている」と感じたとすれば、それは私がすでにそうした動作を以前見たときに「哀愁」という名前が付けられるような感情を既に自分で感じたことがあったからこそ、その動作に対して「さまになっている」と感じるができるのである。

子供達が練習をしているのを見てみると、高学年の子達は小さい子に比べると、慣れていて「さまになっている」と感じた。それは、はっきりと踊り方を言葉で説明されることはなくても、盆踊りに関わってきた年数が長いから、「どうすればさまになるかという感覚」をからだで学習しているからだと考える。そして、感情の経験が増えるからというのも理由であると思われる。

南浦集落のBさんが小学生までの女の子達に踊りを教えている時に、子どもたちが教えられた振りをどれもぞんざいな様子で一様に動いているのを見たBさんは、子どもたちに「その動きの時はこうならんか普通」と言って動きの見本を見せていた。例えば顔に手をかざす動作にしても、「顔に手をかざして」と言われて、子どもたちは言われた通り、その前にした動作と何の関連性もわからない様子で手を顔の上に持ち上げる。しかし、Bさんは手をかざす動作をするにしても、その前の動作から続くものとして1つの流れで動作を断絶せずに動く。それはBさんが経験的に「この動

きからこうした動きに移行する時にはこうするのがよい」という認識を持っているからである。逆に言えば、子どもたちはそれまでそうした動きを見たことがないので「こうするのがさまになる」という認識を持っていない、その動作から微妙な感情の動きを感じ取ることができない。そのため動作に意味付けをすることができないのである。

このように、踊りにおける表現には「この場合にはこうする」という踊る個人のあらかじめ持っている経験的な認識と深い関係がある。

このことから言えることは、踊りにおいて表現をおこなうには「この場合にはこうする」という個人の認識を助ける秩序を使うことが自分の感情とからだを動かす方法の1つとして有効であり、一方で個人的な表現を作り出すためには、踊りの様式という秩序の中に個人の表現する余裕としての「あそび」が必要であるということである。

その「あそび」がどのくらい必要であるかは、その時々で変わってくる。形式が非常に厳密に秩序立てられて決まっている踊りの技術を極めることで非常に小さな「あそび」の部分を探り当てるような芸術も存在するだろう。例えばクラシックバレエなど形式が厳密に決まっている踊りには「あそび」の部分を探るのは難しいのではないだろうか。

しかし、盆踊りの場合はまた状況が違ってくる。姫島盆踊りには振りが難しい踊りも多く存在し、

そうした踊りを踊りこなすことで見る人を感動させたり踊る人を満足させることもある。しかし、姫島盆踊りにはそうした踊りもあるが、「誰でも踊ることができる踊り」が主要なものであることが重要なことだった。なぜなら姫島盆踊りとは芸術を志す人々のためだけにあるものではなく、踊りたい人全てに開かれているものだったからである。特に昔の姫島盆踊りは、労働をして過ごす日々の中で大きな楽しみとしての行事であった。だからこそ、姫島の盆踊りはその形式に個人によつての違いを許容する「あそび」が必要だったのである。

第4節 集団の保持と許容のバランス

この節では姫島の「若者宿」の在り方と「組」という独特の言葉の使い方について説明することで、姫島の間人関係を規定するのはどのようなものであるかについて若干の考察をおこなってみよう。

まず、「若者宿」について説明をする。

姫島村青年団が結成されたのは大正6年である。それまでは若者はすべて、地区内の「若者宿」に出入りしていた〔姫島村史編纂委員会：1986、348〕。「姫島村史」によると「宿には、人望のある、世話のできる夫婦が選ばれた。宿の主人は、親代わりとなって、若者達の面倒をみた。苦言、挨拶、仕事ぶり、村のしきたり等、日常生活

の世話から縁談にまで関与した。〔前掲、348-349〕』という。そして「若者宿の若者達は、祭りや盆踊りの準備、夜警、道普請、台風や嵐の警備、遭難船の救助などに活躍した〔前掲、349〕』という。

大海区長のCさんによると、昭和40年ごろまで大海では若者達が公民館で寝泊りをしていたという。戦後の時分に青年だったCさんも、その頃公民館で寝泊りをしていたそうだ。姫島は「天下晴れて」夜這いが認められていたところ〔吉川：1975、115〕であった。若者達は漁に出たり、緊急の事態に備えて公民館で待機するなどといった仕事をし、夜は「夜遊び」といって娘さん達の所に遊びに出かけていたそうだ。Kさんは「あの頃はそうとう悪いことしてたよ」と言う。出かけていっても口も利いてくれない娘さんがいて、悔しさのあまり娘さんを押えつけて、隠し持っていたコショウを口に押し込んで帰ってきたこともあるという。保存のために外の涼しい所に吊るしてあるお餅や果物を勝手に取って食べたりしたこともあるそうだ。南浦集落の人に聞いた話では、鍵がかかっている部屋の鍵を壊して中に入ったというものも聞いた。ただし、姫島の夜這いは娘さんに無理やり迫るといった直接的な性関係を意味するものではなく、あくまで「娘さんの家に遊びに行く」ことを意味していたそうだ。無理やり迫ってくる若者は娘さん達に嫌われていたという話も聞いた。

しかしCさんによると、このようなことをしていたにも関わらず島の人には大目に見る空気があったという。その一方で、公民館の礼儀の指導などはとても厳しかったという。「昔は厳しい面もあったけどその代わりいい部分もあったな」とCさんは笑って話す。

これらの事例における青年達は、ある面では集団の秩序を厳密に守ることを求められ、一方では羽目を外すことを許容されていた。

現在は夜這いの習慣もほとんどなくなっているという。しかし、約30年前ぐらいまでは一般的におこなわれていたということから、こうした習慣は現代の姫島の人の秩序についての考え方に若干の影響を与えていると考える。

次に方言として姫島でよく使われる「組」という言葉について説明する。

「組」というのは、姫島の日常会話で頻繁に使われるが、その意味はその時々で異なっている。大海集落を例にあげてみると次のようなものがあつた。

1. Aさんのご家族のことを大海区長のCさんが「あん(あの)組は踊りが好き」と言った。ここでは家系のことを指している。

2. 婦人会の「弁慶と義経」という踊りの練習中に、横で私が弁慶の踊りを見様見まねで踊っているのを見た婦人会の人が、義経役もいたほうがいいだろうとって、中老の女性を呼んでくれ、2

人組になった。練習が終わった後、「やっぱ組がおったほうがええよなあ」と言われた。ここでは2人組の相手のことを指している。

3. Sさんが10日の練習中に青年に「青年は集って組の話し合いせんでいいんか」と言っていた。ここでは踊りの役ごとの数人の集団のことを指している。

4. 婦人会の人が2人で今度同窓会があるという話をしている時、「うちん組は42と43歳や」と言っていた。ここでは同学年の集団を指している。

5. 踊りの練習が終わった後で、練習を見ていた老女が「組に入って踊ろうかと思ったけどもう踊りがよくわからんわ、忘れとる」と言っていた。ここでは特定しない踊りの集団を指している。

6. 姫島では集落ごとに、回覧版や役場からの配り物を配布するとき、行事の役割を分けるときなどに使われる「班」という区分がある。大海には6つの班があり、1班につき10軒~12、13軒ごとに分けているようだ。その1つの班のある区域を指して組という言葉で指すことがある。

7. 「女組」といって婦人会の人たちのことを指す場合。

言うまでもなく「組」という言葉自体は日本語として特殊な言葉ではない。私が「組」という言葉が気にかかった理由は、会話の話し手が組が指す集団の輪郭に全く頓着しないからである。それを横で聞いていた私は、「それは親戚関係を示し

ているのだろうか、それとも家族のみだろうか」と考えて気がかかったのだ。そしてそれらの集団を全て「組」と呼び、多用することを不思議に感じた。

この「組」という言葉が姫島の中で何の混乱もなく使われ会話がされていくのは、会話をする人々が話しの文脈で「どの辺りの人を指しているか」が分かるからである。横で聞いている私に気がかかったのは「どの辺りの人を指しているか」分からなかったからである。

このように、関係が密な集団内では、それが何を指しているのかをはっきり示さずに集団内の感覚で使われる言葉が多い。家族同士で「あれ取って」と言ってそれが通じるのと同じである。しかし私はそれが「組」という集団を分け人間関係を示す場合に多用されることに関心を持った。

「組」という言葉は何の集団に対してもその時々文脈に合わせて使われるため、それで名指しされる集団は名前による特殊性を持つことがない。逆に言えば、その示す集団に何らかの特徴があるために「組」という言葉で話題に出るのだが、「組」と呼ぶことでその違いを曖昧にしていると考える。この「組」という言葉はあらゆる話しの文脈で使うことができ特殊な言葉ではないために、名前を付けてその集団を特殊化することなく使うことができる。そして、それは集団の特殊化による集団同士の対立や断絶を招くことを防ぐという利点も持っているのではないかと考える。

この節では、姫島の昔からの青年の在り方が、厳密な秩序がある一方で型破りな行動をすることを許容されるというバランスによって成り立っていたのではないかと考えた。そして、「組」という方言には、特定の集団を特殊化せず一般化する働きがあるのではないかと考えた。

これらの例から、秩序を保つ一方でその秩序を過剰に働きすぎないものにして「あそび」の部分が残しているという共通の性質を見ることが可能だと考える。そして私はこうした集団と秩序の関係性が、姫島盆踊りと秩序の関係性と重なる可能性があると考えた。

次章では、姫島の盆踊りを踊る人々が盆踊りに何を望んでいるかをより具体的に知るために、姫島の人に聞いた盆踊りについての話しや私の実際の体験から、実際の盆踊り自体がどのようにおこなわれてきたのかを説明していく。

第3章 姫島の盆踊り観

第1節 盆踊りへの熱狂

この節では、昔からの盆踊りが姫島の人にとってどのようなものであったのか老人達に聞いた話を中心に説明していく。

昭和52年に発行された「観光姫島」において、次のように書かれている。

「盆踊りは島の年中行事のうちで、一番楽しい

催しの一つである。青年男女はもちろん、老も若きも、村長さんも、議員さんも、学校の先生も、駐在の巡査さんも、みんな一緒になって、（中略）この4日間は全島が踊りのルツボとなる。」

〔酒井：1977、52〕

「踊り子の非常な熱情こそまた他に見られない特徴である。」〔酒井：1977、54〕

この記述は、盆踊りが島全体で4日間おこなわれるわけではないということは別にしても、多少誇張が加わった表現だと考えるが、実際はどれくらい盆踊りが盛んだっただろうかと考え、島の老人達に出会うたびに盆踊りについてたずねてみた。

金集落に住む老女には、「金と大海集落は昭和31年に電気が通るまでは月の光が当たるところで盆の練習をしていた。金は谷だからあまり光が当たるところがないんだけどね。子どもの数が少ないから男も女も踊ってたよ。昔はお盆に盆踊りの太鼓の音が聞こえると夜家にはおれんかったね。いてもたってもおれんかった。盆踊りの日は夜どこで寝たのかわからない日もあったね。TVも漫画も娯楽が他になかったから。楽しかったねえ、あの頃は。」というお話を聞いた。これに似た答えを聞くことは度々あった。稲積集落に住む老女に話を聞いたときもやはり同じように「昔は太鼓の音を聞いたら、いてもたってもいられなくなって家にじっとしていられないくらい踊りが大好きだった」という答えが返ってきた。

南浦集落の路上でござを敷いて集まっていた70代初めの老女達の輪に入っておしゃべりに参加した時にも話を聞いた。老女達のうち2人は、昔から姫島に住んでいた人で、2人もまた「昔は太鼓の音を聞いたら家の中にはおれんかったよ」

「盆のときはほとんど晩ご飯とか食べんやったな。」と口々に話してくれた。そして、「踊りに行くときは、みんな紋付きや訪問着などのいい着物を着て、高下駄やぼつくりを履いて行っていたね」という。髪の毛はかんざしをしたり、日本髪に結ったりと、凝った髪型にしたそう。そして、「昔の人はみんな踊りが上手だったよ、腰（の重心）も低くて。」という。

衣装については大海集落の路上で話した老女にも似たような話を聞いた。「盆踊りは昔と変わりました？」と聞くと、「全然違うねえ、昔の方が派手やった。着物もいいのを着て行きよったし。」という。

役場の出納課の方には、「昔の人はそうとう練習していたため、足が痛くてトイレで座れなくなってしまったこともあった」というお話も聞いた。

盆歌についての話も聞いた。昔の盆歌は種類がもっとたくさんあり、番数も長く続けられるものだったという。そして昔の人はそれを20番も30番も覚えていたのだという。

そして、「あの人たちは親子代々踊り好きだ」という話も聞いた。大海区長であるCさんによると、大海集落で盆踊りの指導をしているAさんの

「組」（ここでは家系のことを指している）は先祖代々芸事が好きな家系だという。Aさんの母親には、「私も踊りが好きでねえ」という話を聞いた。そして、Aさんの妹も踊りが好きで今も大海集落の青年が踊る「田植え踊り」の牛の「口取り」という牛をひく人の役をしている。Aさんも、踊りが好きだったため踊りを作ったり教えたりするようになったという。

こうした話から、盆踊りを盛り上げていたのは盆踊りが好きな人々の積極的な参加だったということがうかがえる。

第2節 「外踊り」

「外踊り」の演目について、「姫島村史」では次のように書かれている。

「姫島盆踊りの特長は、創作の踊りがあることである。全国にはどんな踊りがあるか知らないが、少なくとも県下で、創作の踊りがあるのは姫島だけであろう。鶴崎踊りをはじめ、有名無名の踊りはたくさんあるが、いずれも振り付けは決まっっていて、ただ服装が変わるだけである。姫島の盆踊りで創作の踊りは、服装も振り付けも考案する。（中略）そして、それが芸術的であるか、娯楽的であるかは別として、新しく振り付けられた創作の踊りは、一年踊っただけで惜しげもなく捨て去っていく。これが姫島の盆踊りの特長である。〔姫島村史編纂委員会：1

986, 529〕」

以下に、「外踊り」が実際どのように作られていたのかについて聞いた話を列挙していく。

南浦集落のDさんの話「姫島の盆踊りはもともと1年ごとに変わるものだったんやと思う。毎年新しく作る創作踊りが基本。だけどそれに観光が関わってくることで、毎年キツネ踊りやアヤ踊りが見たいなどという観光客の希望に応えるために、それを名物にしていく、という気運が出てきて毎年同じものをするようになる。本来は毎年同じ踊りをする面白くない。昔は7月に毎年来る旅芸人の芝居を見たり、TVや雑誌からヒントをもらったりして「今年はこれをしよう」という感じで決めていた。もし今だったら、NHK大河ドラマの『北条時宗』から踊りを作るとか、『不況』や『参議院選挙』をヒントに踊りを作るような感じで。」

南浦集落の路上で老女達に聞いた話「昔は7月の禊祭りより前に祇園祭りというのがあって、その時芝居小屋に旅芸人が来たりしていた。そして踊りの手付けさん（師匠）がそこに来た芸人の動きを見て踊りに取り入れていた。」

南浦集落で約40年踊りの創作と指導をされているBさんは、3～4年ごとぐらいに新しい踊りを作り、それらのBさんが作った踊りを他の集落が真似をしたこともあったそうだ。例えば「パン焼き踊り」などがそうだという。踊りを作るとき

はTVや雑誌から着想を得るといい、私が見せて頂いた雑誌は坂東玉三郎の特集された雑誌であった。雑誌から衣装を参考にして踊りは自分で考えたり、「曾我物語」や「忠臣蔵」などの物語から場面を抜き出して踊りにしたりしたという。

大海集落のAさんの話。Aさんは約20年踊りを教えたり創ったりされている。10~20個は創ったそうだ。やはりAさんもTVを参考にした、自分が今までやってきたことや見てきたことの中から題名を最初に考えて踊りを創っていったりすることが多いそうだ。1回踊って踊らなくなった踊りとして、塗るまねをする「左官踊り」などがあったそうだ。最近やってない踊りでは、「たぬき踊り」が踊られ始めてから踊る機会がなくなった「どじょうすくい」という男の子どもの踊り、「舞妓と相撲取り」という手の動きが難しい踊り、「巡礼お鶴」という着物を着なくてはいけないので最近の女の子達が嫌がる踊りなどがあるそうだ。

以上のように、「外踊り」とは、その年毎に違う題材を見つけて新しく作られていくものであった。

このように多くの踊りが踊られるのは、盆踊りを毎年見る姫島の人自身が楽しむためであったと考える。第2章で説明したように姫島の盆踊りは踊る人自身が楽しむために風流と習合し、常に変化し続けてきたのである。長く続けられている踊

りもあるが、それは「評判がよかったから来年も踊ろう」ということが理由であり、姫島の人自身に欲求があったからこそ続いてきたのだ。しかし、本来姫島の人自身が盆踊りを楽しむためには「意外性」があるかどうかがとても重要である。

それは、時には秩序を「壊す」ことも必要なことであるということだと考える。姫島盆踊りには秩序を一定に保ち長年踊りつづけられる踊りもあれば、一方で秩序の保持より「あそび」の部分が大きい一年限りの踊りもあり、そのように様々な種類の踊りが混在していることで、常に新しい発想を試すことができるような活性化した場を作り出してきたのだと考える。そのため、飽きたり、状況の変化が生じた時には、思い切ってその踊りの趣向を変えたり、踊るのをやめることも新しい踊りを生み出すためには必要であったのである。

そこで次節では、集落ごとに練習がおこなわれる「外踊り」とは異なり、当日まで何が出て来るのかわからない、即興の踊りとして知られるアバレポーについて述べる。

第3節 アバレポー

アバレポーという名称を、初めて聞いた島の外の人には、「盆踊りを邪魔するものなのか」と捉えることが多い。しかし、その解釈は姫島の人々の認識とずれたものである。アバレポーとは祭りを盛り上げる役目を果たすものであり、島の人々はアバレポーの登場を楽しみにしていたのである。島

の人に「きれいな踊りとアバレが交互にあるのがいい」という話を聞いた。アバレポーは卑猥な扮装をしたり奇抜な工夫をしたりするものであるが、それにより他の踊りと存在を引き立てあうことにもつながっていると言える。

アバレポーについて聞いた話を以下に挙げていきたい。

南浦集落のDさんの話「昔は、夜7時や8時まで酒を飲んでいて、『さあ踊りに行こうか』と何人かで急に行って踊ったりしていた。ちゃんとしたグループなどは決めないで『踊りたいから踊るんじゃ、何が悪い』という感じがあった。3～4人でアバレをする人はたいがい踊りが上手な人。子供の頃はアバレをしている人の正体を当てるのが楽しかった。変装していて誰なのかわからないから。」

「魚を入れて海に沈めとくのに使う大きなかご（1mほどの幅があるもの）を引っくり返して紙を張って亀にして上に乗って浦島太郎の踊りをしたりしていたこともある。本物の牛を盆坪に連れて行ったりとか」。これはおそらく40年ぐらい前の話である。

南浦集落の古老の男性の話「アバレは40～45年前は盛んで自分もやっていた。巨大なわらこづみ（斗尺）に『おこ』という松の木の枝の先端を尖らせたものを突き刺して盆坪に持って行って踊ったことがある。それから、本物の牛を連れて

行ったり、鍬を持っていったり、卑猥なことをしたり、色々。」

大海集落の老女の話「お嫁さんに来た頃は子供の盆の準備が忙しくて自分が踊ることはできなかった。今は毎年同じような踊りを踊るけど昔は毎年全然違っていたから衣装の準備がとても大変だった。でも1度だけ踊りに出たことがある。『踊りに行こう』と言われて行ったらアバレだった。みんな鬼の面とかひょっとこの面をかぶってじいさんは着物の尻をまくって。ゲートボールの玉をほうきで打った。名前を付けるとすればゲートボール踊り。」と笑いながら話してくれた。

大海集落のAさんの話「出産するアバレとかあった。おなかの膨れた人と医者の変装をした人がたらいを持って行って湯を浴びせたり。他には、葬式の変装をしたり。大掛かりなものが多かった。1つの寸劇のような感じだった。ひそかに何人で準備をしていたりした。」

南浦集落の中老の男性に聞いた話「素っ裸で出て行く人とかもいた。」

南浦集落のBさんの話「蒲団を背負って行ったりする人もいた。」

大海区長のCさんの話「昔、亀が大海のたんぼにいてそれが『こうず』と呼ばれていて、大海の人は『こうず』という呼び名で呼ばれていた。そして金部落は山ばかりだから『猿』と呼ばれていた。まだ他の集落に踊りに行かなかった頃でも、大海と金はお互い盆の時行き来して踊っていた。

そしてある年、15日に大海に踊りに来た金の人が亀の変装をしたアバレをしに来て、『ばかにされた』と思った大海の人は、あくる日にお返しに猿の変装をしてアバレをしにでかけて行った。大人の大猿と子供の小猿がいっぱい行った。袖なしの赤い服を着たのを覚えている。自分はまだ小さかったから小猿をさせられて面白かったよ。」

「大海にすごくアバレが好きな男の人がいた。そのお母さんも踊りが大好きだった。その人は普段はとても無口で話し掛けられても答えにくいくらいおとなしい人だった。でも盆じゃないときから1年中次の盆に何のアバレをするか考えていて準備をしていた。」

これらの話しからかつてはアバレボーが非常に盛んだったことがうかがえる。

前節の「外踊り」も、アバレボーも、変化が大きかったという点では同じである。これは、姫島の人自身が楽しむためというのが最も大きな理由として考えられる。毎年のことなので変化がなければ飽きてしまうのである。

しかし現在姫島ではアバレボーはほとんどおこなわれていない。そして「外踊り」の演目も昔ほど変化しないようになっている。そのため「盆踊りはさびれた」という話をする人もいる。そうした変化はよく「他に娯楽が増えたため」という言説で説明されるが、私はそれだけが理由であることに疑問を感じる。なぜなら、姫島盆踊りは踊る

人がよりよく表現するために生まれ、状況の変化に従って常に新しい変化をしてきたものであるため、それほど簡単にその変遷を遂げてきたものの価値が失われることはないと考えるからである。

その点を考えるために、次節では、現在の姫島の人が姫島盆踊りに対してどのように臨んでいるかについて的一端を知るために、大海集落の青年たちと共に盆踊りの練習、本番に参加したことについての記述をしていく。

第4節 アバレ踊りを踊る青年達

私が大海の盆踊りに参加した平成13年の青年団は8月15、16日に田植え踊りを踊った。青年団は、学生は入らず、地元で働いている人のみが入る。大海集落の区長であるCさんによると青年団への所属は、男子は28才、女子は26才までである。以下この章で「青年」と言う時は、青年団に入っている人のことを指す。

私は大海の盆踊りに参加するにあたって、具体的にどの踊りに参加するかは練習に参加するまで決めていなかった。しかし、7月に南浦の港で出会ったEさんとFさんという同年代の女性と話した時、彼女達に大海の青年の踊りはアバレがあるから面白いという話を聞いていた。現在の姫島盆踊りには本来のアバレボーはほとんどいないのだが、「外踊り」の演目にはアバレボーのようにその時々即興性が高い踊りもあり、姫島の人はそうした踊りの即興性が高い部分を指して「アバ

レ」と呼ぶことがあるのである。私は彼女達の話
を聞き、自分と同じ世代の人が盆踊りをどう考え
ているかということに興味があったので、青年の
踊りである田植え踊りに参加をすればそれについ
て考えるきっかけがつかめるのではないかと考え
た。

大海の盆踊りの練習は8月7日から始まった。
練習場所の大海の公民館に来ている人達は、大体
世代別に集まった場所にいる。青年は公民館内に
靴を脱いで完全に上がっている。大人の男の人た
ちや幾人かの老人会の人は公民館前に出された木
の長椅子に腰掛けている。婦人会の人は人数が多
いためかほとんど椅子には座らず、公民館前のコ
ンクリートでできた段に腰掛けている人が多い。
そしてみんなが集まって色々と喋っている。そし
て子供達は、公民館前の広場を遊び場にしている。
これは練習が行われた約1週間の間ほぼ同じだっ
た。

その日、婦人会の役員が何の踊りをするかを婦
人会の人たちの希望を聞いて決めていたので、
「姉ちゃんは何の踊りに出るんか」と聞かれる。
私は5月のカレイ祭りに来た際にたぬき踊りのメ
イクをしてもらったことがあり、「たぬき踊りに
出るんやろう」と言う人もいた。私はそうした経
緯もあり観光客に人気があるという点が気がかか
っていたためたぬき踊りにも参加したかった。た
ぬき踊りも田植え踊りと同じ15、16日の2日
間踊られるので両方に2日間出ることにはできない。

そこで1日ずつ別々の踊りに参加させてもらえな
いだろうかと思った。私は、1日ずつ参加したい、
などと言って大海の人に迷惑がかからないだろう
か、ということが気にかかっていた。そして、も
し迷惑になるようだったらどちらかの踊りに2日
とも参加しよう、と考えていた。

私はその日まで大海の中老や古老の方達とは話
をしていたが、青年達と話すのは初めてだった。
私は、自分と同じ世代ということもありかえって
少し緊張をしていた。経験として、特に若い人の
集まりは自分の領域に他人が入ってくることにと
ても敏感な反応をすることがある、と考えていた
からである。自分がその領域に入り込んでいくこ
とで不快な思いをさせてしまうのではないかと
考えていた。上記のように青年はほとんど公民館
内部に青年だけで集まっていることが多いので、
話し掛けるためには公民館の中に入っていき必要
がある。

私は思い切って田植え踊りに参加したい旨を青
年達に伝えてみた。すると、田植え踊りで「あ
ぶ」というアバレ役になることが決まっていた普
段から青年の盛り上げ役のような存在である男性
のGさんが「よっしゃ酒のましてやる」と言う。
田植え踊りを踊る青年達は盆坪を移動する合間
お酒を飲むのだ。そしてたぬき踊りにも出たいと
思っている、ということと言うと、青年男性の一
人が「たぬきの格好で田植えに出ればいいやん」
と冗談のニュアンスを含んだ口調で言う。そうし

た答えだったので、後日私は15日にたぬき踊り、16日に田植え踊りを踊らせてもらうことに決まった。そして、青年達は、私が田植え踊りに出たい、といった時に返した言葉などからも、盆踊りを堅苦しい形式でやりたくない、と考えている人が多いと感じた。

その日、Aさんなどの中老達が公民館前で「田植え（踊り）はほんとにアバレん方がええのになあ」「昔は婦人会が踊りよって、ちゃんと踊りよった。」などと話していた。現在、田植え踊りは青年の踊りでは、踊り自体よりもアバレの要素が目玉になっているが、以前は婦人会が踊っており、踊り自体に重点が置かれていたという。その昔の踊りを知っている中老達から見ると惜しいと感じられるのだろう。

中老達はこの話題においてアバレ自体を非難している訳では決してない。しかし、この話から、大人たちが田植え踊りを形式を崩さなくても良い踊りだと考えているのに反し、青年達はあえて自分達でその形式を崩しているということが推察できる。それは、昔は多く見られたアバレボーが現在ではほとんどいなくなったことが関係しているのではないだろうか。つまり、祭りの場に変化を与え盛り上げて楽しませたアバレボーという役割の喪失を、もともとアバレではなかった踊りにアバレの要素を加えてそれを補おうとしているのではないだろうか。

8日から10日までは、青年男性の何人かは毎日公民館の練習の時間にやってきて、主に公民館の内部で青年同士で話をしてそのまま練習の終わりごろに帰るか、練習時間の途中でいつのまにかいなくなっている。10日にAさんが「田植えは集まって組の話し合いせんでいいんか。明日は休漁日だから人がおるんやないか。」と青年に言ったが、青年達ははっきりした返事をしない。休漁日もなかなか人は集まらないようだ。そのやり取りに対してCさんが「盆は本当は青年主催やぞ」と言っていた。

しかし、11日は青年がいつもより多く集まり、青年女性の2人が仕切り、田植え踊りの話しが少しされた。まず田植え踊りの踊り手の役割を紙に書き出す。「あぶ」「うし」「くちとり」「もみまき」「ならし」「いとひき」「うえて」「たぐさとり」「かりて」「だっこく」「たわら」、などの役割があり、それぞれ数人ずつ担当を決め、その役割ごとに違う小道具を使い、違う踊りを踊る。役割によっては人数が限定されているものもある。「うし」は牛のかぶりものをかぶるので2人、「あぶ」は1人と決まっている。盆に何人青年が集まるかを紙に書き出しどこに何人振り分けるかを考える作業をしていた。

その話の途中で、青年女性の知り合いらしい南浦の女性がやって来た。役割を書き出した紙を見て「ここ、こんなん書いたりするん。まじめやな。」と言い、大海の女性が「いや今日が初めて

や」と答える。そのやり取りから南浦の青年もそれほど力を入れて盆の練習をしているのではないことが推測される。南浦の女性らが話しているのを聞いていると、南浦の青年の中に「自分達も田植え踊りがしたい」、と言っている人がいるという話題が出ていた。やはり田植え踊りは姫島の青年の人の間で評判が良いようである。

その日の練習後に、高校生のH君が「田植えが大海の踊りで一番おもしろえ」と言った。理由を聞くと「踊りがおもしろえ」と言う。その答えについて考えていると、これも高校生のI君が「田植えは移動中に酒飲むからむちゃくちゃですよ。大海の盆坪に帰ってきたときには大体くたばります」と言う。2人によると田植え踊りは「とにかくアバれる」という。やる人がみんな大体踊りを覚えているから練習はほとんどせず、「ぶっつけ本番」に近いのだそうだ。

そして最後の練習日である13日にほぼ全員の青年が集まって誰が何の役割をするか決めて練習をした。公民館の中で役割を決めたら、外に出てまずは広場の端の方で役の順番で並んで練習をする。並ぶ順番は大体上に役割を書いた時の順である。米を植えてから収穫するまでの順番に役割が並んでいるのである。ただし、「あぶ」「うし」「くちとり」は踊りの振りがあるわけではないので練習はしない。みんな「最初どうやったっけ？」などといいながら踊りを思い出している。

覚えている中老の男性を呼んで、来てもらい少しずつ教えてもらって踊りの流れを思い出して3度ほど合わせたら広場での練習は終わり、盆坪が出来る予定の場所で円になって太鼓と盆歌に合わせて練習するために、婦人会の練習が終わるのを待つ。田植え踊りの踊りは前にも述べたように役割ごとに違うのだが、「ソライターソライターソライターヨイヨイ」という掛け声を出す時は、踊り手はみんな踊りの組が同じ人と飛び跳ねながら場所を一度入れ替わってまた同じ方向に戻るように4回飛び跳ねる所は同じ踊りである。踊りはみんな大体の振りのみを合わせているといった感じで、ボンアシの方向も人によって一定していなかった。しかし、「ソライター・・・」の部分の踊るときの青年達には活気があった。私はその日まで他の色々な踊りの練習に参加しており、踊ることに楽しさを感じていたのだが、田植え踊りにはそれに加えて、祭りのにぎやかで活気のある自由な感覚がした。練習が終わると、みんなのまとめ役を自然におこなっている元気の良い青年女性の2人が「(ソライター・・・のヨイヨイの所で)私ワッショイって言うかも」「チェケラッとか言おうか」などとにぎやかに笑いながら冗談交じりの調子で話している。私は田植え踊りの練習はその日が初めてだったので、大体の踊りの流れはわかったのだが、「ソライター・・・」の部分の足がどちらの足からなのかがはっきりとよくわからなかった。青年の女性の人が「まさよちゃん大丈夫そう？」

と聞いてくれたので、「ソライターはどっちの足からですか？」と聞くと、「テキトー、テキトー！合った方。当日は酒飲みながら行くよ」と言う。

上記の会話をしていた女性2人が婦人会の「弁慶と義経」という踊りの練習を観ながらにぎやかに話している。「弁慶と義経」は、振りが複雑で盆踊りの初心者には難しく、ドラマ性のある踊りである。私も以前少しだけ練習に参加してみたが、見様見まねですぐ出来る踊りではなく、ある中年女性は私の拙い様子を見て大笑いしていた。青年女性の2人は練習を見て、「すげー」「Aおじ（Aさんのこと）はすげーな、さすが先生や。あれぐらいはしっかり動かんとか面白くねえわ」「私にも踊らせろってかんじ。」「ギャラリーが少なくなったら踊りてえな」などと言いながら踊りの真似をしたりおどけた格好をして笑ったりしていた。

この会話から、彼女達がアバレ踊り以外の踊りを認めないのではないことがわかる。青年は、アバレ踊りが好きな人が多いが、それ以外の振りが優美な踊りを好まないという訳ではない。北浦集落の「三番叟」という踊りなどは多くの青年に評判が良いようである。「三番叟」は歌舞伎の一場面を参考にして作られた踊りで、衣装が華やかで美しく、鈴を持って踊るなど凝った趣向のある踊りである。

8月15日、私はたぬき踊りに参加する日であ

る。この日は田植え踊りを踊りに行った青年に事故が起きた。

たぬき踊りや婦人会の踊りが最後に大海の盆坪に戻ってきて踊り終わったのだが、青年が何人かは帰ってきているのだが全員はなかなか帰ってこない。しばらくの間は中踊りで待つ間をつないでいたのだが、時間が遅くなったのでその日の盆踊りは打ち切られた。青年達が、酔っていたせいもあり、歩いて移動している時に集団が分かれてしまったという。そして、「あぶ」の役をしていたGさんが踊っていしまったのだそうだ。

その年の大海の盆坪は15日しかないのに、その年の青年は自分の集落で踊れないままになった。「踊りが戻ってこれんかったのは初めてや」と話している人がいる。はぐれた人を探しに行く間に、青年は公民館の中に盆坪に向かって作った集落の人が持ってきたお大師様の像やお供え物を置いた大きな台を協力しててきぱきと片付けた。しばらくしてはぐれていた人も全員大海の盆坪に戻ってきた。

「あぶ」の役をしたGさんが戻ってきて区長さんに「すみませんでした」と頭を下げている。区長さんや周りにいた中老や古老の人たちはことさら叱ることはなく「みんな悪かったんやから連帯責任や」とGさんに笑いながらやさしい口調で言っていた。青年の中のJさんという男性は、周りの中老たちに責められていないのだが、「役を考えて踊れ、とか言うけど田植えとかしたことねえ

もん」などと言っている。Jさんのそうした言葉に中老たちは笑いながら「わからんでもいいから、とりあえず帰ってこんと心配するやろ」などと言う。青年女性のKさんも少しだけ「松原から南（南浦）まで歩かせたのがいけんやったんよ」と、はぐれた理由を主張していた。しかし、それに対して中老や古老は何も言わなかった。

青年の人たちはこの状況を見ていた私に「まさよちゃん明日よろしくね」などと声を掛けてくれた。そして帰り際に会った青年女性のLさんに「明日よろしくお願いします」と言うと、「こちらこそがんばりましょうね」と返事が返ってきた。この後、青年達は公民館で酒を飲んだらしい。

8月16日、この日は青年は10:00に集合して大海の盆坪を片付けることになっていた。しかし、私は遅刻して10:40ぐらいに行くと片付けは完全に終わっていた。区長さんにお聞きすると、青年は10時前には片付けを済ましていたそうだ。前日に怒られたからしっかりやったんやろう、という。

18:30頃公民館に行くと、青年はほぼ全員集まって、炊事場の隣の小部屋でビールを飲みながら喋っていた。前日に足を負傷したGさんは、今日は「あぶ」の役を出来ないためか意気消沈しているようであった。この日は以前ずっと「あぶ」の役をしていたという人が代わりにすることになった。Gさんはその人に代役を頼みに行って

いた。私が部屋に行くと青年女性のKさんが「今日はしゃんとのみいな」と言って私にビールをついでくれた。みんな田植え踊りのための衣装を着ている。ほとんどみんなはもんぺをはいて麦わら帽子を被り、タオルを身に付けるという、田んぼで働く人たちが着ているような服だ。私もかすりのもんぺの上下とかっぱうぎを貸してもらって着た。「もみまき」の役の人には男性なのだが女性物のかすりの着物を着て女性物のシルク製の下着をはいていて、派手目の女性メイクをしている。

「あぶ」の人は上下白のももひきを着てピンクの蝶ネクタイを付け長靴を履いている。そして吹くとあぶが飛んでいるようなプーンという大きな音がするラッパを持ち、背中には大漁旗をマントとして身に付け、発泡スチロールで作った張り子のあぶを背負い、顔にはおどけた仮面を付けている。

青年の人たちは前日の話をしていた。「軽トラから吐いたらそのまま流れていった」「最初いとひきやったのに途中からたわらをしてた」「俺の俵とったやろう」「途中からせと（料理屋の名前）に入ったけはぐれたんかなあ」などと言っていた。話を聞いていると前日は本当はかなり飲んでいたらしい。前日に「田植えしたことねえ」と言っていたCさんが、「三番叟やったらもっとちゃんと踊るぜ、あれはかっこええ。おれやったらもっと上手く踊るぜ。田植えとかいやや」と言う。

そこに中老の人がやって来て前の会話をしていたJさんに「おし（「あなた」の意）の昨日の逆

ギレは無駄な抵抗やったぞ、ていうか話が違ったで。」と言い、「元気ないぞー青年、お前らは飲まなつまらんぞ！」と笑いながら言って出て行った。区長さんは今日の回る順番を告げにきて、「あんまり飲みすぎんようにな」と言って出て行った。

19:00に出発した。青年は軽トラックの荷台に小道具類を積み込み、その隙間に自分たちも乗り込む。青年の軽トラは計3台で後ろに6人乗り込む車もある。私は青年女性のLさんと2人で荷台に乗り込んだ。移動中2人でいろんな話をした。仕事のことや私の地元のことを話したり、車の荷台から空を見て、星がきれいだね、と話したりといったたあいのない会話だが、車の荷台に乗るのはあまり普段ないことなのでそれだけでも楽しい経験であった。

まず、金集落の盆坪に行った。着くと地面に直に座ってビールを瓶のまま回し飲みしながら踊る順番を待つ。「もみまき」役の人は腰にティッシュの箱を取り付けている。もみでなくティッシュをまくのである。私は「うえて」なので、植える草が小道具である。

踊る順番が来た。まずみんなが盆坪に入場する前に「あぶ」と「うし」と「くちとり」のアバレ役が入場する。「あぶ」の役の人がラッパを吹きながら盆坪に走って入っていき、突然盆坪の中の柱にぴたっとあぶのように止まったりし、観ている人から笑いがおこる。そして牛が暴れたり、あ

ぶが牛の所に走って行って一緒に倒れたりする。そして場を盛り上げた後、踊り手が入場すると、笛で合図をし、盆歌が踊り始めの箇所に来たら踊り始める。

青年達の踊りは活気に溢れたものだった。「もみまき」役の人たちはティッシュを盆坪に撒き散らす。私は踊っていて知らず知らずの内に笑顔になっていた。私は練習が十分でないため、初め2人で回る所で戸惑ったが、「ソライター・・・」という箇所飛び跳ねればそれでつじつまが合っているような気になる。そして、踊っている内に、踊り自体ももっとよく見せたい、という感情が起こってきた。まわりに活気があるためか、私の苗を植えるしぐさも活気のある大きな身振りになっていく。前日のたぬき踊りと違い、集団で1つのものを形成する踊りだからこそ創り出せる勢いがあり、自分達が場を盛り上げているという実感があった。

中央フェリー広場に移動した。盆坪の順番を並んで待っていると、観客の中年女性が手動の田草取りの機械を持って並んでいる青年男性のJさんに話し掛けてきた。「昔はこれを使いよったよねえ」「先の所が壊れてるね」などとその機械について話し、Jさんは「これTVで鑑定してもらたんよ」などと受け答えをし、会話がしばらく続いていた。

西浦の盆坪に移動して踊る。盆坪に入場すると青年女性のKさんが盆坪の外側に知り合いの子ど

もを見つけたらしく、踊りが始まるところにもかかわらず、盆坪の囲いを越えてその子どもの所に駆け寄って話し掛けていた。

その後、踊り終わって車まで歩いていると、手踊りの扮装をした中年女性達が大海の青年に「田植えはもっとアバレな！」と笑いながら声を掛けていた。

北浦の盆坪に行くと、踊りの組が非常に多く順番待ちをしている状態だった。他の組の踊りを見たりしながら路上に座ったりして順番を待つ。大海の中老男性Mさんの隣で盆坪の踊りを見ていると、Mさんが「この踊りはさびい(寂しい)な」と批評したりしている。そして、大海集落の「弁慶と義経」が踊り始めると、「うわ、弁慶もさびいな、他の所のこといえんな、坊さん踊りみたいや」などと笑いながら言っていた。私が見ると、確かに「弁慶と義経」は静かな踊りであるが振りの凝った優美な踊りである。しかし本来はこのような踊りによって場を盛り上げることを期待する人がいて、一人一人が自分の感じた感想を自由に口に出すのが、島の人が姫島盆踊りを見る時の常態なのだろうと考える。彼らはそうやって踊りを見ているときには客に踊りを見せるためにそこにいるというよりも、自分たちが楽しむためにそこにいるのことに重点をおいている。

そして北浦で踊り終わり、これで予定の盆坪は回り終わったのだが、青年女性のKさんが「南(南浦)も行こうえ！」と言い、南浦にも踊りに

行くことになった。南浦でも「もみまき」の役の人が客席の方に向かって着物をまくり女性もの下着をはいたお尻を突き出してティッシュで拭く動作をしたりして客席を沸かせていた。

そして大海の公民館へ戻った。中老達などから「今日の田植えは上出来や!」「バッチリやないか!」などと言われる。青年女性のKさんは今日は大海に盆坪がないにもかかわらず「昨日大海で踊れんやったけ今日ここで踊ろうや」とか「中央今からもっかい行こうえ」と言ったりし、「弁慶と義経」が全部の盆坪をまわったと聞いて「弁慶は全部行ったんやん、松原(の盆坪)も行けばよかったんや」と言っていた。他の青年達はもうビールを飲んでくつろいでいたが、Kさんはまだ踊りたりない、といった風であった。青年達は「あそこの盆坪はさびいな」とその日の盆踊りのことを話したりしている。

前日「あぶ」の役をしていたGさんは一緒にまわって踊りを見ていたのだが、大海の盆坪に戻ってきてから「(その日「あぶ」の役をやった人の動きをみていて)今まで自分が牛を倒すとかおんなじ動きばかりしていたのが外から見たらよくわかった。」と言う。まわりの青年達が「逆に自信つけたんやねえ?」と冗談めかして言ったが、Gさんは笑わずに「勉強になった。俺の方がもっと面白くできると思った。」と言う。

青年達は、中老や古老の言うことやそれまでの

慣習に縛られすぎること嫌う傾向がある。しかし、青年達はそれまでの経験から、盆踊りの楽しみ方を自分たちで理解しており、自立した大人としてより楽しめるものにしようという意志も持っている。もちろんこうした傾向には個人差があり、盆踊りに全く興味がない青年も存在する。しかし、盆踊りが昔ほどの求心力を失った中で、青年達が愚痴をこぼしながらも積極的に楽しんでいる姿から、現代における盆踊りの在り方を考える上で何らかの示唆が得られるのではないだろうか。

第4章 新たな視線

第1節 審美傾向化

姫島では昭和46年に「アヤ踊り」「キツネ踊り」「銭太鼓」が、昭和50年に「猿丸太夫」が村指定無形文化財となった。そして、昭和48年に「キツネ踊り」と「アヤ踊り」、昭和49年に「銭太鼓」、昭和50年に「猿丸太夫」の保存会が結成された。

これらの踊りは人気があったために長く踊られてきた踊りである。しかしかつては途中で踊られなくなった時期があったものもある。しかし、今ではこれらの踊りは毎年必ず盆踊りで踊らることになっている。

「姫島村史」にこうした記述がある。「姫島の盆踊りは二種類ある。伝統的踊りと前記の創作踊りで、前者はアヤ踊り、キツネ踊り、銭太鼓（ぜにだいこ）、猿丸太夫などである。伝統的踊りは、

既に書きつくされ、語りつくされた。創作踊りは姫島盆踊りの大部分がこれで、或る時は笑いを呼び、或る時は親しみを呼び、共感を呼ぶ」〔姫島村史編纂委員会：1986、529〕。

「外踊り」には人気があったために長く続いできたものがあり、それらは「伝統踊り」と呼ばれるようになっている。「伝統踊り」と呼ばれる踊りは、保存会があり無形文化財に指定されているものである。

それではどのような基準のもとで、「保存会」や「無形文化財」が置かれることになったのだろうか。松尾恒一が民俗学者の本田安次について論じた「本田安次の方法と思想」から引用して考えてみたい。

松尾によると、本田は全国にわたる<民俗芸能>の探訪とそれについての考証・記述といった<研究>ばかりでなく、民俗芸能の、保存育成にも大きな力を尽くした〔松尾：1993、41〕という。そして、全国の民俗芸能の重要文化財への指定は、その大きな仕事の一つであるが、これは主として文化財保護審議会委員としての仕事で、すなわち、<文化財行政>の立場からの民俗芸能へのかかわりも大きかった〔前掲〕そうである。そのため、本田の仕事は姫島盆踊りにおける保存会の結成や無形文化財の指定にも関わるものである。

本田によれば、芸能は次のように定義されるものであるという。

「（一）ある時、（二）ある場所において、

(三)それを鑑賞する人々の前において、(四)身をもってなそうとする芸術表現〔松尾：1993、57〕」。

そして松尾はこの定義に考察を加え「本田の定義に従えば、民俗芸能とは「民間に伝承された、美の表出を目的とした、舞台での上演が可能な、身体表現」ということになる〔松尾：1993、59〕」と書いている。そして、「そもそも<民俗芸能>なる領域が画定されるに際して基準の大きな柱になったのが、舞台芸能として耐えうるか、いい換えれば演劇学・美学の対象として扱えるか否かということであった〔松尾：1993、62〕」という。そしてその定義にあったものが、保存会の結成や無形文化財の指定に当たるものとして選ばれたということである。この定義では、「踊る側の主観」ではなく「観客として見る側の判断」がその判断を大きく作用することがわかる。

アバレポーは近年中央フェリー広場の盆坪（以下、「中央」）で踊ることが禁止された。南浦集落のBさんによるともう15～20年前ぐらいのことだそうだ。議会で話し合われることもなく「なんとなく」で決められたことだという。理由としては、「中央」は最も観光客が集まる盆坪なので、素っ裸でアバレをしにきたりする人がいるのは良くないというような理由だというが、詳細は明らかではない。

島の人に盆踊りのことを尋ねた際に「自分たち

のために踊っていたのが観光客に見せるためになった」という言葉がよく聞かれた。その言葉から、前章までで説明してきたような「踊る人が主体の盆踊り」から「見る人が主体の盆踊り」へと変化しているという意味合いが読み取れる。

上に列挙した、保存会の結成や無形文化財への指定や「伝統踊り」という呼称の定着やアバレポーの禁止などの事項に共通することは、それまでの盆踊りの様式が取り入れられていった過程と違って、それらが踊る人の欲求によって決まったことではなく、島の外から踊りを見に来る人のために決まったということである。

この傾向が悪いものであるかどうかは別として、それまでとは違う見方が生まれたことは確かである。

そこで次節では姫島における「見せること」についての事例を具体的に記述して説明をする。

第2節 「見せること」についての事例と考察

まず、私が姫島で観光客の在り方について疑問を感じたエピソードについて紹介したい。

7月の調査中に島内を巡っていた私は、南浦集落の港を通りかかり、屋根と水槽がある所に人が集まっているので行ってみた。「こんにちは」と言って傍らに座って見るとウニを割って中身を出す作業をしていた。割る人と中身を出す人は手分けして作業をしている。水槽の中にはカレイの稚魚が泳いでいる。「姫島カレイ」として稚魚から

育ててある程度育ったら海に放すのだそうだ。

「これは売るんですか？」と聞くと「いやこれは売らない、あっちでやっている人のは売り物」とそこで作業をしていた男性が教えてくれた。教えられたほうを見てみると、私と年齢が同じ位の女の子が2人で作業をしていたので話し掛けてみた。(ここではEさんとFさんとする。)

「こんにちは」と言って話し掛けて、傍らに座って作業を見た。二人はウニのなかみから内臓やごみやへそなどをピンセットで取り除いて水の入ったたらいに捨てる作業をしていた。このウニは瓶詰めにして売るのである。

ずっと見続ける私に二人が話し掛けてくれる。初めは、お互い敬語で話していたのだが、色々話すうちにしだいに打ち解けてきた。

そして座る椅子を貸してもらい作業を見ていると、サングラスをかけている観光客らしき若い男性が、作業をしている横に来て、突然、「それ(ウニ)おいしい？」と話し掛けてきた。Eさんはウニが嫌いだと言っていたので「おいしい」と思っているはずはなく、これは売り物で二人が食べるわけではないためおいしいかどうかはわからないということをそれまで話をしていた私は把握していた。二人は「はあ・・・」などと曖昧な笑いで答える。

男性が「その黒いのって内臓？」と聞くので「はらわた」とEさんが答えると「はらわたって内臓じゃん」と言って笑った。そして、男性は

「水槽でも飼ってんの？」と言って水槽を覗く。

Eさんが「カレイの赤ちゃんが・・・」と答えていると「ああ稚魚か」と言い、去っていった。

そしてまた少し経って4～5人の観光客らしき人々がやってきた。少し笑いを浮かべながら近寄ってくる。そして私たちを取り囲んで上から覗き込む。「うわー内臓をとってるんだねーすごいねー」とそこにいる私達に話し掛けるでもなく自分達で話し、去っていく。

彼らが去っていった後、Fさんは「観光客って怖くねえ？」と言い、Eさんは「サングラスかけると表情わからんけ怖い」と言っていた。

私が出会った彼女達は他者を一方的に否定するわけではない。姫島の外から来た私を快く受け入れてくれたことから明らかである。だとすれば、彼女達が観光客を「怖い」と言ったのは、彼らの行動の仕方に何らかの原因があったのではないかと考える。

そこで、次に私が平成13年8月15日に参加した大海集落の「たぬき踊り」で自分が「見られる立場」になって、踊り手とそれを見る側の認識のずれを感じた経験について記述する。

「たぬき踊り」は、大海集落のSさんによって約20年前に創られた幼児から小学生までの男子の踊りである。姫島には有名な「キツネ踊り」という2区北浦地区の小学生までの男子の踊りがあり、「キツネがあるならたぬきがあってもい

いだろう」という理由で考えたそうだ。

「キツネ踊り」と「たぬき踊り」は、子ども達が踊る様子や扮装、掛け声がかわいいという評判で、観光客に人気がある。たぬきの扮装は、顔はたぬきのメイクをし、茶色のTシャツに白くおなかとへそが書いてあるものを着て茶色のももひきをはき、腹には発泡スチロールで作った作り物のおなかをさらして巻いて膨らませ、「大福帳」と書いた紙を腰に付け、笠を被り、とっくりを手に持つ。平成12年から5月下旬に中央フェリー広場において「姫島カレイ祭り」という、特産物のカレイを使った特製の弁当を販売する祭りが行なわれているが、そこに特別に盆坪を作り「キツネ踊り」と「たぬき踊り」のみを祭りに来た観光客のために見せている。盆に来られない人が、盆踊りが見られるというのでやってくることも多いようである。

姫島の盆踊りは8月15、16日に全集落の踊りが盆坪を巡り最も盛り上がる。観光客は盆踊りが近づくと徐々に増えていき、本村で盆踊りが行なわれる14日には町に観光客があふれ、にぎやかである。そして、その観光客の中に「カメラマン」の集団をあちらこちらで見かけるようになる。カメラマンは中年の人達がほとんどで、アマチュアのサークルでやってきている人が多い。各集落が盆踊りのための化粧をしている場所や、化粧をした人々がいる路上などで多く見かける。姫島の盆踊りは第2章第2節で書いたように風流として

の特徴が顕著なため衣装など扮装が凝ったものが多いので、被写体として面白いのだと思われる。少し前に大海の高校生のI君にカメラマンの話聞いた。I君が小学生の時は今よりもっとたぬき踊りが人気で、カメラマンが写真を撮ってお金を渡してくることもあったそうだ。そして、今もお金を渡しているかはわからないが、似たような状況はあるという。

8月15日、午後13:30頃から大海集落の踊り手の子ども達の化粧が始まった。化粧の場所は港の前の芝生にビニールシートで屋根を張って作られた。外なのでカメラマンや観光客は非常に近くに来ることができる。

化粧を始めた頃に、子どもの化粧をする婦人会の役員のNさんが、集まってきているカメラマン達に「化粧をしてから子供を連れ回すと化粧が落ちたりするからそういうのはやめてください」と言っていた。

たぬき踊りの化粧も始まっているのだが、子ども達の何人かが化粧場所に来ない。あるカメラマンの人が子供達を車でどこかに連れて行って写真を撮っているらしい。大海区長のCさんがそれを聞いて怒っている。しばらくしてそのカメラマンの男性が化粧場所に車で子供達を送ってきた。その人が子供達にジュースを買ってやるうとしているのを見て区長さんが「何人かの子どもだけにそういうことをされると困る」と言ったが、その

男性は「約束したんで」と言って子供達に自動販売機でジュースを買って去っていった。Cさんはかなりの剣幕で怒っており、その話を聞いた婦人会の人も「そら、わーりい(悪いの意)わ」と言っていた。

化粧風景を見ていると、観光客の中年の女性が化粧をしている小学生低学年の女の子に話し掛けていた。その女性が「何才ぐらいから踊ってるの?」と聞くと女の子は首をかしげた。そして「3才ぐらい?」と聞かれて女の子はうなずいた。そして「盆踊り楽しみやろう?」と言われて、女の子は曖昧に笑ってうなずき会話は終わった。

その後私もたぬき踊りのメイクをしてもらい、夕飯を食べてたぬき踊りの衣装に着替えた。食事をしたためメイクが落ち、メイク直しをしてもらった。するとその様子を写真に撮ろうとしているカメラマンの男性がいた。その時私は接近して写真を撮られることにあまりいい気持ちがいなかったが、「1枚ぐらいは」と思って1枚撮られるまでは何も言わなかった。そしてその後、「撮らないでください」となるべく柔らかめの口調で伝えてみた。しかし、その後もその人は私に許可を求めず写真を3回ほど撮った。メイク直しをしていていた人は「嫌がると逆に撮るんよ」と笑って言う。私は女だぬきだから、と他のたぬきの人の衣装にはないピンクのチョッキを貸して頂いていた。今年のためき踊りに女だぬきは一人だけで、カメラマンにとっては珍しい被写体だったのだと

考える。

そして19:00頃、子どもは踊り手は車に分乗して出発した。その日、子どもは稲積 - 松原 - 中央 - 南浦 - 大海の順で盆坪をまわっていった。中央広場には観光客が非常に多い。この日は約4千人の観光客が訪れたそうだ。踊りの順番を待つ間に、たぬき踊りなどの子供達の踊りは人気があり囲まれて写真を撮られていた。踊りが終わって移動する時も観光客やカメラマン達に呼び止められて写真を撮られる。

そして南浦で踊り終わって車まで歩いていく時に、「お姉さん写真撮らせて」とカメラマンの中年男性が声を掛けてきたので「いいですよ」と答えて立ち止まろうとすると、「いや、歩いていいよ。(道の)真ん中の方を歩いて欲しいな。」と言われたのでそのまま歩く。私は「笑ったりして欲しいのだろう」と考えたが、無表情のままそのまま歩いた。カメラマンは私の様子に不満な様子で、撮った後に舌打ちをして「はいありがとう」と私の背後で早口に言い、去っていった。

加えて、大海の踊りに参加している時以外の事例をひとつ挙げる。

8月16日の昼過ぎに西浦集落の公民館を見学しに行った。そこでは化粧など西浦の盆踊りの準備がおこなわれている。ここにもカメラマンが多く来ている。すると、道端に人だかりができていた。道端に「沖縄踊り」という踊りの琉球装束風の扮装をした小学生ぐらいの女の子が一人いて、

その女の子の横から1人の男性がシャボン玉を吹いており、もう1人の男性がそのシャボン玉をうちわであおいでいる。そして、そうやって演出した女の子の姿を大勢のカメラマンが撮っていた。女の子は黙って無表情に立っている。扮装や化粧の準備が終わった人がカメラマンから被写体になることを頼まれるのをよく見かけていたので、その女の子もそうであると推察する。

次に、「見られる」ことが踊り手自身の励みになっている例を、再び8月15日の経験から記述してみる。

：他集落で踊り終わって車で大海集落の盆坪へ帰った。自分の集落に盆坪がある日は最後にそこで踊るのである。それまで約2週間滞在していて盆踊りの練習をしている集落なので他の集落から帰ってくると安心感があった。盆坪の周りで見ている人も旧知の大海の人が多い。

そして盆坪に入って踊り始めた。私は最後尾に付いていた。たぬき踊りにはほとんど踊りが踊れずに列についていくだけの小さな子どもも参加しており、そういう子どもは後ろの方に並んでいる。そのため、私はその日自分の前にいる子どもが列から離れてどこかに行ってしまうのを列に戻そうとするのを繰り返しており、なかなか踊りに集中することができずにいた。大海でも同じで、踊り始めると前に並んでいる子供が列から離れてしまうのでその子どものところに行き行って列に戻そうと

していた。すると、そうしていた私の所に、外側で見ていた大海の老女が盆坪の柵をくぐって来て、「踊らんか、ってみんな言ってるよ。」と笑いながら言いに来たので、私はその子を列に戻そうとするのをやめて踊りに集中することにした。

みんなが見てくれているのだなと考えると踊っていて嬉しく、これまでで一番いい踊りをしようと考え、全身の使い方に配慮をしながら1つ1つの動きをした。踊っている時に、盆坪の大きさを体で把握できるような感覚があった。そして、見ている人との間に隔たりがなく、いつでも入ってこられる舞台であるため窮屈さがなく、一方で今この時だけ成立する舞台で踊らせてもらっているということがとても貴重な瞬間であると感じ、踊り終わってもらった拍手はそれまでで一番うれしいものだった。

：たぬき踊りを踊った後、フライパン踊りという大海集落の踊りに飛び入りで参加した。これは婦人会の人たちの踊りである。とても派手な柄のワンピースを着て赤いサングラスをかけた人がいたり、麦わら帽子を被って短パン姿の人がいたりといった一貫したコンセプトがない衣装で、二人組みでそれぞれフライパンとしゃもじを持つ。この踊りは、踊りを作った大海集落のSさんが「あれはアバレて踊ればいい」と言うような、振りが簡単でユーモアのあるものである。ある大海の中老の男性も衣装も用意して着て飛び入りしていた。私はたぬき踊りの格好のまま、婦人会のNさんに

公民館の炊事場からフライパンを持ってきてもらい、踊りを見ていた大海の老女にしゃもじの役を飛び入りでやってもらって一緒に踊ってもらった。振りを知らないので、みようみまねで動き、ボンアシをみんなに合わせ、「ソライターソライターソライターヨイヨイ」と言って回りながら飛び跳ねる所は振りに関係なく自分のしたいように飛び跳ねた。そうやって楽しんでいると盆坪の外側から見ている老女から「最高！」と声が掛かった。

例 ・ で挙げたように、「見られる」ことは踊り手にとって必ずしも不快である訳ではなく、むしろそれが励みになることでもある。観客に人気がある踊りが昔から続いてきているという所から、「見られる」ということが盆踊りを踊る側にとって非常に重要であることがわかる。そして、から の事例では主にカメラマンについて取り上げたが、カメラマンの行動が必ずしも踊り手にとって不快であるわけではない。大海集落のAさんは「せっかく撮りに来とるんだから撮らせてやったらええ」と言う。前にも述べたように姫島の踊りは仮装が面白く魅力があり撮る価値のある被写体なので、写真を撮ること自体は許容して良い行為だと考える。しかし、～ の事例における「見る側」と「踊る側」の関係と ・ の事例におけるそれには見る人の視線の違いがあると考え。

～ の事例の「見る側」は姫島盆踊りを「既に形が決まっているもの」と捉えている。一方 ・

の事例の「見る側」は2章と3章で説明してきたように、その状況に応じて踊りが変化することを楽しんでいる。そしてこの節の最初に記述した観光客の事例における「観光客は怖い」という言葉の理由も、「見る側」が実際には状況に応じて様々に変化する姫島の人を「既に形が決まっているもの」として見ようとしている認識にずれが起こるのではないだろうか。

次節ではこれまでの章の記述から姫島盆踊りにおいて「伝統」とは何であるのかについて考察をおこない、これからの姫島盆踊りがどうあるべきかについて述べる。

第5章 考察

第1節 姫島盆踊りにおける踊る主体と「伝統」

これまでの章の記述から姫島盆踊りにおいて「伝統」とはどのようなものなのかについて考えたい。

現在「伝統踊り」と呼ばれているものと、「創作踊り」の違いを明確に指摘するのは難しい。なぜなら長く続いているにも関わらず保存会がなく無形文化財に指定されていないために「伝統踊り」という分類に入っていない踊りもあるからである。

そのため南浦地区のDさんから「もともと全部の踊りの基本は仮装行列で、でもただ行列するだけじゃつまらないから足の動きが考えられた。それで手の動きや飾りが加えられてきた、というの

が成り立ちじゃないかと思う。」という話を聞いて、「伝統踊り」というのは人気があって長く続けられる踊りを創作踊りと呼んで区別しただけで、もともとは同じものだったのではないかと考えた。

E・ホブズボウムは『創られた伝統』の中でこう書いている。「『伝統』とは長い年月を経たものと思われ、そういわれているものであるが、その実往々にしてごく最近成立したり、また時には捏造されたりしたものもある」。そして、「『創り出された』伝統の特殊性とは、歴史的な過去との連続性がおおた架空のものだということでもある」という〔E・ホブズボウム：1992、9-10〕。この主張は、姫島における「伝統踊り」が元々は全て創作踊りだったものの中から近年になって「伝統」と名付けたものであれば当てはまる。

これまで第2章では、まず第1節で姫島盆踊りの源流と言われている盆踊りの念仏踊りが始まった頃は乱舞形式のものであったことを記述した。そして第2節では、思いつきで新しい趣向を取り入れ目先を変えていく特長がある風流と習合したことについて説明した。第3節では、効率の良い足の動きを取り入れることで踊る人が即興性を発揮しやすくなることを述べ、実際のボンアシの練習からボンアシが踊る人の個人差を許容するものであることを説明した。第4節においては、姫島の「若者宿」と「組」という独特の言葉につ

いて取り上げることで、姫島の秩序が厳密な部分を持っている一方でゆるやかさも持ち合わせていることについて述べた。

第3章では、まず第1節において盆踊りは姫島の人々の積極的な参加によって盛り上がってきたことを述べた。第2節では、「外踊り」が姫島の人に人気があって長く続いてきたもの以外は1年ごとに変化するものだったことを説明した。そして第3節では、「外踊り」よりも更に即興的で1度きりしか踊られないアバレボーが姫島盆踊りを盛り上げていたことについて記述した。第4節では大海の青年達が踊りの即興的な部分を重視していることを具体的な事例を通して説明した。

第4章では、第1節では、姫島盆踊りを鑑賞する人々が踊りを美しいと思うかそうでないかということが重視される傾向が起きてきたことについて述べた。そして第2節では、見る側が踊り手を「既に形が決まっているもの」として見ることで踊り手の主体性を無視することにつながる可能性があることを具体的な事例を挙げて説明した。

現在の姫島盆踊りにおいては長く続いてきたものが「伝統」という言葉で呼ばれるが、姫島盆踊りとはそもそも毎年変化をすることで続いてきたものである。そしてその様式が成立する過程では、常に踊る主体の欲求をより良く実現することが重視されてきた。そして様式が成立した後は、踊る人が盆踊りを毎年見る島の人であるために常に変化をし続けてきたのである。

そのため、本来の姫島盆踊りにおいては「変化をせず長く続くこと」ではなく「常に変わること」が「伝統」と言えるのである。

ホブズボウムは、「伝統」とは『旧来の』伝統があてはまらない新たな伝統を生み出し、それに沿って『旧来の』伝統が案出された社会的形式を急激な社会変動が弱めるか、崩壊させるとき、あるいはそうした旧来の伝統とその制度的担い手や施行者がもはや十分な適応力や柔軟性を失ったと判明するか、さもなくばそれらが削除される時に、最も頻繁に生じると考えるべきだろう」〔E・ホブズボウム：1992、14〕と述べている。

姫島盆踊りにおける「伝統」や「保存」という概念も、盆踊りが少子化や共同社会の変化によって昔ほどの勢いを失ったからこそ必要性が生じ起こってきたものであろう。

しかし私はあくまで「形が決まったものが『伝統』である」という概念によって、「常に変化すること」によってより良い形で実現されてきた踊

る主体の欲求が叶えられることが阻害されることはあってはならないと主張する。

現在の姫島盆踊りは長く続いてきた踊りである「キツネ踊り」などを目玉にしているが、姫島盆踊りがこれまで常に変化し続けてきたということを見直す必要があると考える。それは、特定の踊りのみが長く続いているのではなく、常に変化をしながら続いてきたというのがこれまでの姫島盆踊りの在り方だからである。

そして常に変化をすることがこれまでの姫島盆踊りの特長であったという認識を姫島の人も観光客も持つことで、現代の状況に基づく新しい踊りやアパレポーを生み出したり、観光客と踊り手の垣根をはずす試みをするのも可能になると考える。

註

(註1) この数値は「平成12年国勢調査大分県の人口(要計表による人口)」の速報集計結果に記載されていたものであり、後日総務局統計局が公表する、調査票から全数集計される第1次基本集計結果による確定数とは一致しない場合がある。

(註2) この文献の数値は平成7年国勢調査に基づくものである。

(註3) この文献の面積の数値は「平成7年全国都道府県市区町村別面積調」(建設省国土地理院)に基づくものが掲載されている。

(註4) 引用文献によると「来島者：各市町村・市町村観光協会調べによる年間来島者数を掲載しました。注記がないものは平成7年3月～8年2月の数値です。基本的にはその島の住民の移動を除いて、船・飛行機の利用などから集計しています。1島に複数の市町村がある場合、各市町村別の数値の合計が島全体の数値と一致しない場合があります。〔財団法人日本離島センター：1998、『利用の手引き』〕」とある。ここでの引用は注記がなかったため、上記の期間の数値である。

(註5) 「日本の伝統芸能は、マイ、オドリ、フリの3つの動作で組み立てられているといわれる」〔吉川：1997、606-607〕といい、その中で「オドリは跳躍にもとづく動作と考えられているが、日本では跳躍、すなわち両方の足が同時に地面や床から離れる踊りはほとんどない」〔前掲、608〕そうである。「しかし、本田安次氏は、「乱舞」の一種の固定した日本の古いオドリの動きとして、

片足を踏み、その足でとびあがり、

もう一方の足を踏み、その足でとびあがる。

というフミカエアシによる跳躍を考えておられる〔前掲〕という。

(註6) 舞踏とは、1950年代末から1960年代初頭にかけて、日本の現代舞踊の中から誕生し、土方巽を中心に独自の深化、展開を遂げた身体表現である。土方は従来の表現そのものに執拗な問いかけを行ない、そこには従来のダンスの概念のみならず人間存在そのものを解体することなしに何一つ表現が成立しないとするパラドクシカルな構造があった。〔國吉：2000、23-24〕

文献一覧

エリック・ホブズボウム

1992 「序論 伝統は創り出される」 『創られた伝統』 エリック・ホブズボウム、
テレンス・レンジャー編 紀伊國屋書店

兼子俊一 1988 「姫島」 『日本大百科全書 19』 相賀徹夫編 小学館

國吉和子 2000 「二十世紀日本ダンス史」 『PT パブリックシアター』 世田谷パブリックシ
アター

財団法人日本離島センター

1998 『日本の島ガイド SHIMADAS (シマダス)』 発行者同

酒井富蔵 1977 『観光姫島』 国東半島文化研究所

高山茂 1987 「念仏踊」 『日本大百科全書 18』 相賀徹夫編 小学館

西角井正太

1974 「盆踊」 『万有百科大辞典 3 音楽 演劇』 相賀徹夫編 小学館

1988 「風流」 『日本大百科全書 20』 相賀徹夫編 小学館

姫島村史編纂委員会

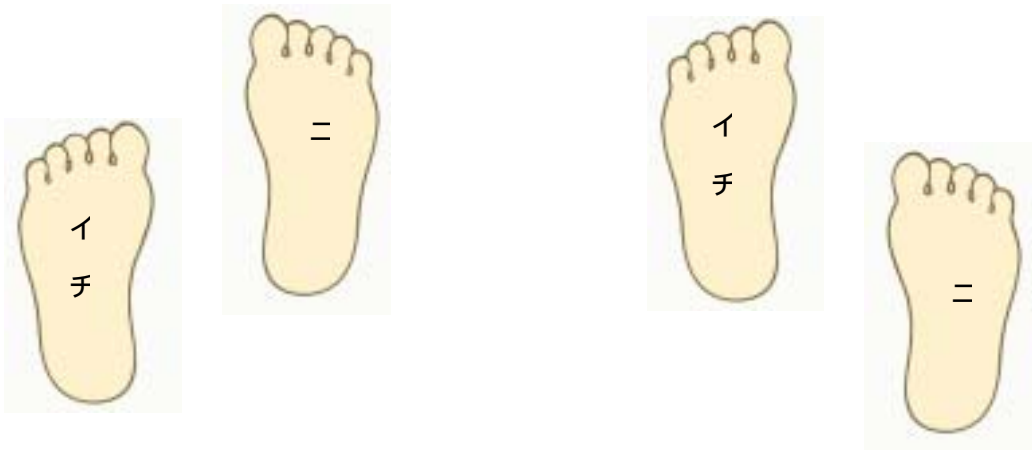
1986 『姫島村史』 発行者同

松尾恒一 1993 「本田安次の方法と思想」 『課題としての民俗芸能研究』 民俗芸能研究会/
第一民俗芸能学会編 ひつじ書房

柳田國男 1990 「日本の祭」 『柳田國男全集 13』 筑摩書房

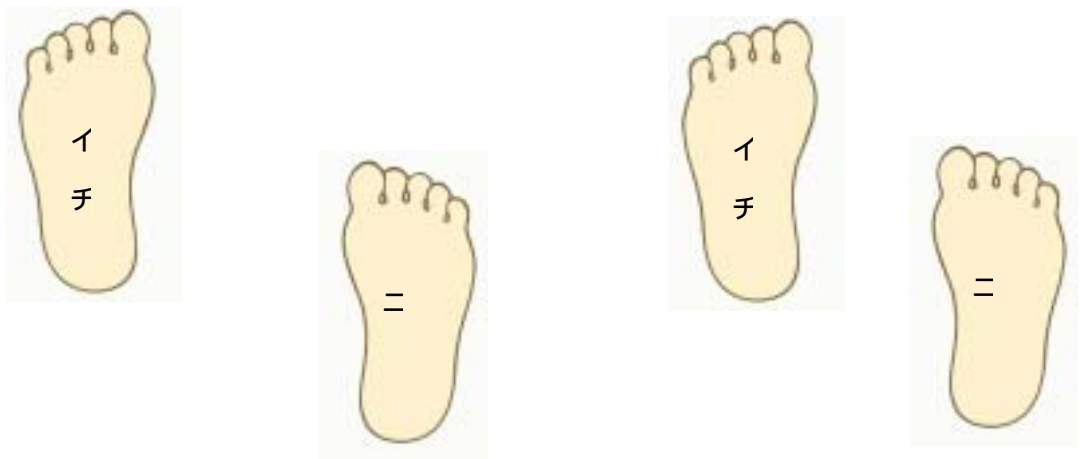
吉川周平 1975 「姫島の盆踊 - 風流と盆踊との研究の手がかりとして」 『演劇研究 第7号』
早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

1997 「ボンアシ 盆踊りにおける足の運びが意味すること」 『体育の科学 第4
7巻 第8号』 杏林書院



Aさんの盆足

女の子の盆足



男の子の盆足

著者の盆足

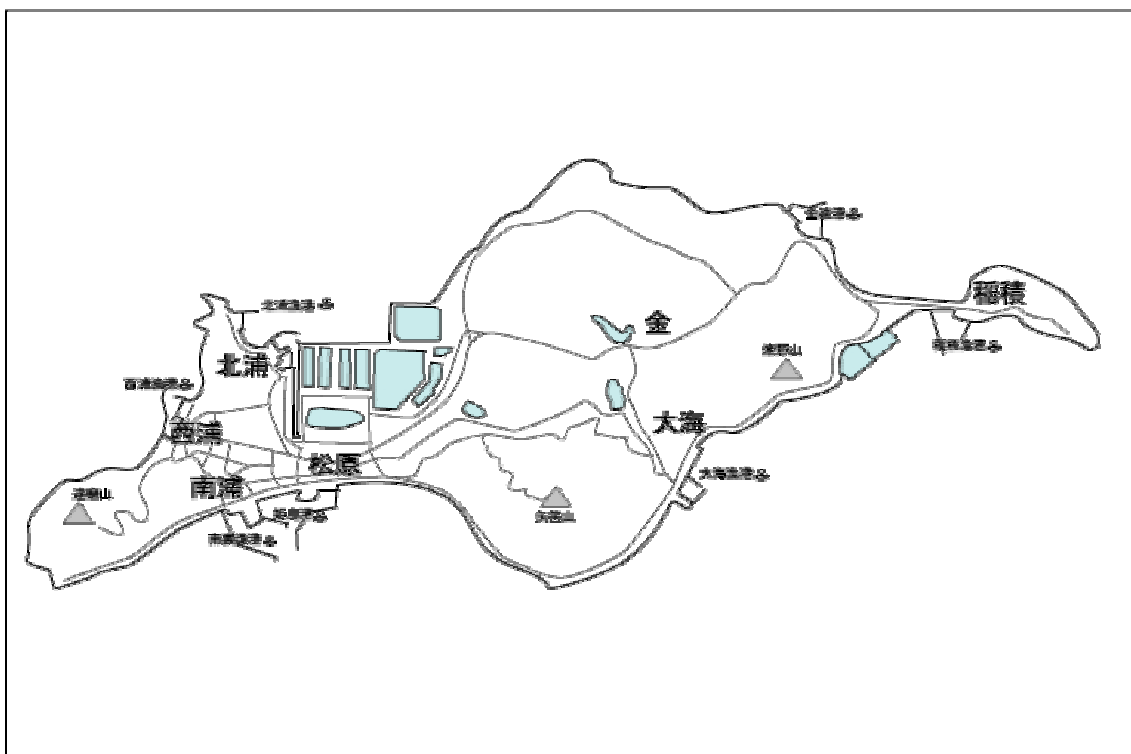


図2：姫島の集落

